

平成25年度神奈川県考古学会講座

主催 神奈川県考古学会

共催 横浜市歴史博物館

時空の交差点 — 遺跡の保存と活用 —

平成26（2014）年3月16日
神奈川県考古学会

開催次第

日 時 平成26年3月16日(日) 9:50~16:30

場 所 横浜市歴史博物館 講堂

開会挨拶 岡本 孝之 会長 9:50~9:55
趣旨説明 9:55~10:05

講 座

- 1 2万年前のイエ 史跡田名向原遺跡の保存・活用 木村 弘樹 氏 10:05~10:45
2 横浜市三殿台考古館における遺跡の保存と活用 橋口 豊 氏 10:45~11:25

（休憩）

- 3 東村山市における遺跡の保存と活用 千葉 敏朗 氏 13:00~14:00

（小休憩）

- 4 鎌倉市・国指定史跡永福寺跡の整備 小林 康幸 氏 14:05~14:45

- 5 史跡・天然記念物 旧相模川橋脚に見る保存と活用について 大村 浩司 氏 14:45~15:25

（小休憩）

パネルディスカッション 15:35~16:25

閉会挨拶 中村 若枝 副会長 16:25~16:30

※開催次第では紙面都合により各講座の副題は省略させていただきました。

例 言

- 本書は神奈川県考古学会が平成25年度考古学講座として開催する「時空の交差点—遺跡の保存と活用—」の資料集である。
- 本書の編集にあたっては、千葉敏朗（東村山市ふるさと歴史館）・木村弘樹（相模原市教育委員会）の両氏及び大村浩司・小林康幸・橋口豊の会員諸氏から玉稿を賜った。記して感謝申し上げる。
- 本講座は、神奈川県考古学会が主催し、横浜市歴史博物館に共催いただいた。講座担当は、井出智之・中三川昇・宇都洋平・横山諒人・五十嵐暁であり、役員諸氏の協力を得た。また、本書の編集は同担当により行った。

平成 25 年度考古学講座「時空の交差点－遺跡の保存と活用－」の開催にあたって

遺跡の保存と活用は、テーマとしては決して新しくありません。そして、今後も常に課題がつまとうテーマと言えます。その手法は試行錯誤の段階であり、現在保存が検討されている遺跡、保存の方法について検討中の遺跡、すでに保存され活用方法が検討されている遺跡、すでに保存され活用もされているが新たな展開を模索している遺跡など、その位置や課題はさまざまです。

また、2014年の今、数百年から数万年前の埋没したはずの空間が現出する様は、時間と空間とを超え、現在と交わるいわば「時空の交差点」のような存在なのかもしれません。この交差点は、遺跡や歴史に身近な立場である人からすれば当たり前であっても、そこから縁遠い人にとってみれば、多分に違和感のあるものと言えるでしょう。そして、その距離感は必ずしも遺跡からの距離と比例するとは言えません。すぐ近所に住みながらも、得体の知れない空間、あるいはその他の都市公園と同じような空間として認識されている場合も少なからずあるのではないでしょうか。

一方で、遺跡に身近なはずの人間にとっても、避けて通れない壁が待ち受けています。その遺跡について最も詳しく解説できるのは、まさに調査を担当した人と言えるでしょう。

しかし、すでに多くの遺跡がそうであるように、行政担当者も世代交代が現在進行形で進んでおり、直接遺跡を掘っていない、あるいは調査現場を見てすらいない担当者へとバトンが渡されようとしています。このことは、「調査後の保存」という観点だけでなく、「保存を見越した調査」の必要性も意味しています。今後、世代交代の中で、バトンを渡す側と、受け取る側が各々どのような姿勢で保存と活用に関わるかが重要となるでしょう。そして、受け取る側は、いずれバトンを渡す側になることを肝に銘じる必要があります。

そうした状況で、やはり最もエネルギーにあふれているのが、遺跡や歴史を身近に感じ、遺跡の保存・活用に積極的にかかわる周辺住民をはじめとした市民の方々です。また、学校の協力をもって、子どもから大学生まで幅広いつながりが形作られることも重要です。こうしたことから、一過性ではない、継続的な保存・活用へとつながっていくのではないかでしょうか。

本年度の神奈川県考古学会での考古学講座は、こうした課題や魅力をもつ保存と活用について、県内での実践例および東京都下宅部遺跡の積極的な活用事例をそれぞれ担当された方々に紹介していただきます。遺跡の保存と活用について、今どのような活動が行われているのか、これからどのような展開ができるのかについて考える機会となれば幸いです。

最後に、講座開催にあたり、講師をお引き受けいただいた皆様、共催者として会場を提供いただいた公益財団法人横浜市ふるさと歴史財団・横浜市歴史博物館に厚く御礼申し上げます。



2万年前のイエ 史跡田名向原遺跡の保存・活用



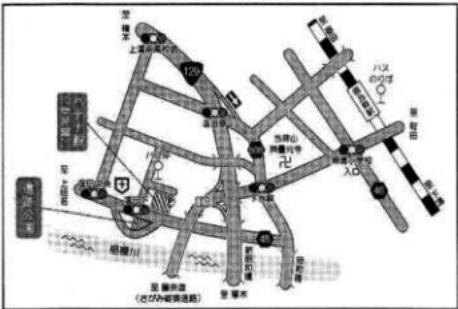
旧石器～古墳時代まで体感できる普及事業と文化財ボランティアの活躍

木村 弘樹（相模原市教育委員会）

はじめに：相模原市内の遺跡の概要

相模原市は、神奈川県の北西部に位置し、人口約72万人、面積が 328 km^2 で、相模川と境川の間に形成された台地中心の旧市域と、丹沢に連なる山間部の多い旧津久井郡地域からなる。

市内には530ヶ所の埋蔵文化財包蔵地があり、そのうち旧石器時代の田名向原遺跡、縄文時代の川尻石器時代遺跡、寸沢嵐石器時代遺跡、勝坂遺跡の4つが国指定史跡となっている。



田名向原遺跡の案内図

1 田名向原遺跡の発見、保存から整備

史跡田名向原遺跡は、相模原市田名しおだ土地区画整理事業に伴う発掘調査において、平成9年に発見された旧石器時代の建物跡（約2万年前のイエ）で、「住居状遺構」と呼ばれている。そして、人類定住化の歴史を語る上で重要な遺跡として保存が決定し、平成11年1月28日に国指定史跡となった。

その後、相模原市において遺跡の保存・整備事業が行われ、平成19年に国指定地730.45m²を含む保存・活用ゾーン約4,000m²が史跡田名向原遺跡公園としてオープンした。住居状遺構は公園内に復元され、縄文時代の竪穴住居、古墳時代の谷原12号墳等とともに公開されている。

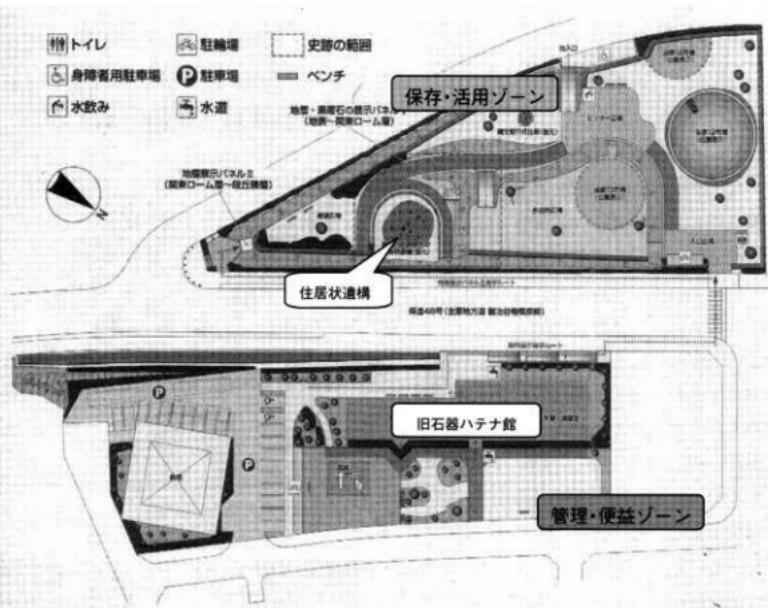
また、平成21年にはガイダンス施設「史跡田名向原遺跡旧石器時代学習館（愛称「旧石器ハテナ館」）を含む管理・便益ゾーン約4,000m²がオープンした。なお、整備経過については、表1のとおりである。



田名向原遺跡住居状遺構の発掘



田名向原遺跡住居状遺構（手前）と旧石器ハテナ館（奥）



史跡田名向原遺跡公園内図



保存・活用ゾーン（南から）
住居状遺構（手前）、縄文竪穴住居（左奥）、
谷原12号墳（正面奥）



旧石器ハテナ館（正面入り口側から）

表1 史跡田名向原遺跡の整備経過

年度	内容
平成9年	住居状遺構発見 田名向原遺跡調査整備検討委員会設置
平成11年1月28日	国の史跡指定（730.45m ² ）
平成11年度	「田名向原遺跡調査と整備に関する報告書」策定
平成12年度	田名向原遺跡整備委員会、田名向原遺跡研究会設置 『史跡田名向原遺跡保存整備基本構想』策定 出土資料等研究調査委託
平成13年度	『史跡田名向原遺跡保存整備基本計画』策定 第2次発掘調査（住居状遺構追加調査）、古植生復元試料分析調査
平成14年度	『史跡田名向原遺跡保存整備基本設計』策定 報告書「田名向原遺跡Ⅰ」刊行 史跡指定地用地購入
平成15年度	土壤堆積微細構造軸X線分析業務委託、測量業務委託（保存・活用ゾーン） 第2次調査出土品整理 第3次発掘調査（保存・活用ゾーン） 報告書「田名向原遺跡Ⅱ」刊行
平成16年度	『史跡田名向原遺跡保存整備実施設計』策定 第4次発掘調査（管理・便益ゾーン）
平成17年度	『史跡遺構再現実施設計』策定 報告書「田名向原遺跡Ⅲ」刊行 遺構保護工事、保存・活用ゾーン整備工事①（設備工事含む） 第3次調査出土品整理 地質・測量調査測量委託（管理・便益ゾーン）
平成18年度	史跡遺構等再現工事、保存・活用ゾーン整備工事②（設備工事等含む） 『ガイダンス施設建築及び展示基本・実施設計』策定 史跡田名向原遺跡公園開園（保存・活用ゾーン）
平成19年度	ガイダンス施設建築工事（設備工事含む）
平成20年度	ガイダンス施設展示工事、ガイダンス施設外構・駐車場工事 ガイダンス施設の名称を「史跡田名向原遺跡旧石器時代学習館」と決定 史跡田名向原遺跡旧石器時代学習館の愛称を公募し、「旧石器ハテナ館」と決定 「相模原市立史跡田名向原遺跡旧石器時代学習館条例・同施行規則制定
平成21年度	史跡田名向原遺跡旧石器時代学習館（旧石器ハテナ館）開館

○事業費の概算

文化財所管課総事業費	合計 約 614,000 千円	(単位 千円)
発掘調査・整理・報告関係	約 29,000	保存・活用ゾーン整備工事関係 約 160,000
ガイダンス施設整備関係	約 270,000	その他（報償費、役務費） 約 12,000
史跡用地・公園用地購入関係	約 143,000	

うち国庫補助金 約 178,000 千円（文化庁・国土交通省） 県費補助金 約 9,000 千円

* その他、公園課による用地購入費 1,209,090 千円

2 田名向原遺跡の活用

田名向原遺跡の活用を図る普及事業は、ガイダンス施設「旧石器ハテナ館」を中心に実施している。旧石器ハテナ館には非常勤特別職の学習指導員を配置し、管理・運営、案内解説、体験学習の指導などに従事している。

普及事業については、学習指導員と所管課の市教育委員会文化財保護課の職員が連携して、事業を企画・運営している。普及事業の内容は、表3のとおり体験教室、イベント、講演会に大別でき、特に毎月第3日曜日には石器作りなど定例体験教室が行われている。普及事業のテーマは旧石器時代にまつわるもののが中心であるが、遺跡公園、旧石器ハテナ館には周辺の田名塩田遺跡群、谷原古墳群で発見された縄文時代、古墳時代等の展示もあるため、旧石器時代に限らず幅広く展開している。

イベントは、地元有志「ハテナ館と地域をつなぐ会」など関係団体の協力による旧石器ハテナ館まつりやナイトミュージアムなど多くの参加者が集うものほか、周辺の文化探訪や、相模川の河原石を活用した講座、相模川支流の八瀬川の探検など館の立地を活かした普及事業も開催している。

また、年間を通じて各種の団体見学があるが、特に4~6月頃には学校による見学が多い。これは、旧石器、縄文、古墳の3つの時代を体感して学べる施設であるため、歴史学習において子どもたちが時代の流れを理解するのに効果的であるためと考えられる。

表2 旧石器ハテナ館の施設概要

構造：鉄骨造、鉄板葺き、平屋建て
面積：621.61 m ²
主な施設 展示室：216 m ²
実習・講習室：95 m ²



表3 旧石器ハテナ館の普及事業（平成24年度）

小学生による団体見学

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
定例体験 第3日曜日	勾玉	土器	埴輪	弓矢	勾玉	矢じり	尖頭器	編布	勾玉	矢じり	土器	弓矢
イベント	旧石器調査 速報展	厚当駅～ 向原探訪	八瀬川 源流探訪	八瀬川歩き・ 魚観察	ナイト ミュージアム	旧石器ハテ ナ館まつり		作品展				縄文調査速 報発表会
講演会・講座	谷原古墳			石器貯蔵		黒曜石分析	岩宿バス ツアー		縄文環状 聚落			石器連続講座
館報尖頭器			発行			発行			発行			発行
つなぐ会遺跡 事業	ナイトミュージアム、旧石器ハテナ館まつりにて地場産物紹介、老人会など地元団体事業運営など 年3~4回程度)											
案内・普及実 行委員会	*ボランティアガイドなどの案内・解説、普及活動 4月から3月の第1~第4日曜)											



黒曜石による尖頭器作り



シカを狙ってやり投げ体験



相模川での石器作り



相模川の支流 八瀬川探検



旧石器ハテナ館まつりでの石蒸し料理体験
(地元有志「ハテナ館と地域をつなぐ会」の協力)



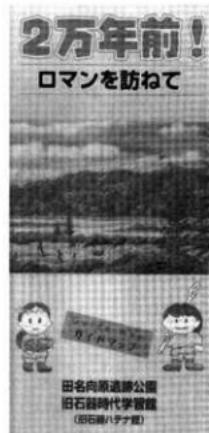
ナイトミュージアム～クイズ&肝試し
(谷原12号墳の石室内に肝試し)

3 相模原市の文化財ボランティアと遺跡案内・普及事業

田名向原遺跡の普及事業を担っているもう一つの組織が文化財ボランティア「文化財調査・普及員」の有志で構成されている田名向原遺跡案内・普及実行委員会である。

文化財調査・普及員とは、市民と行政のパートナーシップに基づき平成15年度に設置された文化財ボランティア制度で、登録者講習会に参加し、第3者で構成される推薦会にて推薦された者が登録され現在66名が登録されている。その活動は、6つの地域班による指定・登録文化財のパトロール、文化財普及事業へのスタッフ参加、機関誌『さねさし』の発行などが主な活動であるが、その他に有志で各実行委員会を結成し、田名向原遺跡、勝坂遺跡、古民家園の案内ガイドや普及事業の企画・運営などを市から受託し、行っている。

田名向原遺跡案内・普及事業実行委員会の主な活動は、毎月第1~第4日曜日の遺跡公園と旧石器ハテナ館における案内解説である。また、その他に、旧石器ハテナ館まつりなどの大きなイベントへのスタッフ参加、探訪事業の企画・運営・ガイドマップ作成、他の遺跡へのバスツアーの共催などに活躍している。



実行委員会作成
探訪用ガイドマップ

文化財調査・普及員

現在の登録者 1期~6期生まで 66名 (2年に1回募集、再登録は妨げず)

男性の60歳以上の方が多いが、会社勤め、主婦の方もおり、中には30代女性も2名登録している。

地域班（全員所属）
…年2回等のパトロール
 北部班
 西部班
 東部班
 南部班
 東南班
 津久井班

分野物班（希望者にて班活動）
…研究・活動の成果を機関誌等に発表
民俗班、考古班、古道・地名班、石造物班

実行委員会（有志にて結成）
…市と委託契約を締結し、案内や事業を実施
古民家園保存・普及実行委員会
田名向原案内・普及実行委員会
勝坂遺跡活用実行委員会



館内展示の案内解説



縄文竪穴住居の案内解説



旧石器ハテナ館まつり弓矢ゲーム指導



岩宿遺跡バスツアーの随行

4 田名向原遺跡における課題

田名向原遺跡は、平成 26 年 3 月で公園開園から 7 年、旧石器ハテナ館開館から 5 年となった。旧石器ハテナ館開館以来の延べ来館者は平成 26 年 1 月現在で約 17 万人（年平均約 34,000 人）に達し、また、普及事業は毎月第 3 日曜の定例体験事業など毎年 25 本程度の事業を開館以来開催している。

しかし、史跡整備を行った他の遺跡同様に田名向原遺跡でも管理面や、普及事業を企画する上で課題を抱えている。現状におけるその課題を挙げると次のとおりである。

- ① 交通の便の悪さ ……最寄駅（JR 相模線原当麻駅）からバス（1 時間に 1 本）か徒歩 45 分
- ② 近隣学校までの距離……一番近い小学校で約 2 キロ程度あり、徒歩で 30 分程度かかる
- ③ 来館者の減少傾向 ……初年度は約 6 万人。その後は年々減少し現在は約 3 万人程度
- ④ 展示物のメンテナンス…住居状遺構の色合いなど展示物の経年劣化や破損
- ⑤ 普及事業のマンネリ化…定例体験などのメニューや例年事業の恒例化
- ⑥ 旧石器時代中心の限界…旧石器時代だけでは講師も限られ、専門性が高く集客力が低い

これらの課題は、田名向原遺跡の立地の問題や予算をかけなければ解決しがたい課題もある。現在、遺跡付近の交差点名称やバス停に遺跡名称を入れてもらえるよう関係機関に働きかけ、近く実現する予定である。その他、今後も案内板の充実、PR用パンフレットでの周知をはかりつつ、一方、ソフト面では楽しみながら学ぶことができるような普及事業などを企画し、課題解決に取り組みたい。

また、平成25年には車で5分程度の所にさがみ縦貫道相模原愛川ICができ、インター降り口から田名向原遺跡が望める位置にある。今後、さがみ縦貫道利用者が田名向原遺跡に来訪してもらえるような案内方法を、現在検討中である。

5まとめ

田名向原遺跡は、全国でも数少ない旧石器時代を中心に史跡整備を行った事例で、かつ旧石器、縄文、古墳の3つの時代を体感して学ぶことができることが特徴である。遺跡の保存・活用については、試行錯誤の部分もあり未だ十分とは言い難いが、今後も来園、来館者に貴重な遺跡を理解してもらえるよう良好な保存・普及に取り組んでいきたい。

特に、普及事業については、地域や市民の視点を取り入れ、行政と市民が連携した事業を行い、来園、来館者に楽しんでいただく事業を充実していくことが必要であると考えられる。そのため、今後は文化財ボランティア「田名向原遺跡案内・普及実行委員会」や、地元「ハテナ館と地域をつなぐ会」などとさらなる連携を図り、普及事業を展開していきたい。

最後に、田名向原遺跡に来られたことのない方、来たことはあっても普及事業に参加したことがない方、文化財ボランティアの活躍ぶりを参考にしたい方など、ぜひ旧石器ハテナ館までご来訪いただければ幸いである。

旧石器ハテナ館の案内

住所：相模原市中央区田名塩田3-23-11 電話：042-777-6371

休館：12/29～1/3 イベント：毎月第3日曜日ほか

開館時間：午前9時～午後6時（4～10月）、午前9時～午後5時（11～3月）

アクセス：JR相模線原当麻駅から望地キャンプ場行入口行バスで「塩田下」下車または

原当麻駅から徒歩45分（駅南口に案内看板あり）＊駐車場は23台（バス4台可）

引用・参考文献

- | | | |
|-----------|-------|------------------------|
| 相模原市教育委員会 | 2009 | 『国指定史跡 田名向原遺跡 保存整備報告書』 |
| 相模原市教育委員会 | 毎年度発行 | 『相模原市文化財年報』 |
| 相模原市教育委員会 | 1998 | 『相模原市「田名向原」旧石器時代遺跡の調査』 |
| 相模原市教育委員会 | 2003 | 『田名向原遺跡』Ⅰ |
| 相模原市教育委員会 | 2004 | 『田名向原遺跡』Ⅱ |
| 相模原市教育委員会 | 2006 | 『田名向原遺跡』Ⅲ |
| 相模原市教育委員会 | 2010 | 『田名向原遺跡』Ⅳ |

横浜市三殿台考古館における遺跡の保存と活用

三殿台遺跡について

橋口 豊（横浜市歴史博物館）

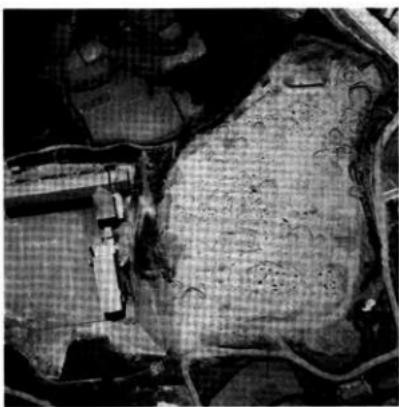
1. 三殿台遺跡の発掘調査

国指定史跡三殿台遺跡（以下、三殿台遺跡）は、縄文・弥生・古墳時代の集落遺跡です。横浜市の南部、南区との境界にあたる磯子区岡村の標高約55mの台地上に位置し、東に房総半島、西に富士山、北に横浜ランドマークタワーなどのMM地区を望む景観の良い立地にあります。

明治31（1898）年の12月、市内在住の医者の藤田清^{きよ}沢^{くわ}は往診の途中で、貝塚を発見し土器片や骨、歯牙製垂飾などを採集しました。藤田は東京帝国大学人類学教室へ連絡し、翌明治32年3月に、同教室の助手を務めていた鳥居龍三を遺跡に案内し、貝塚であることを確認しました。この貝塚は同年5月発行の『東京人類学雑誌』158号で、「岡村貝塚」として紹介されました（横浜市歴史博物館2011）。

昭和29（1954）年に三殿台遺跡の東側隣接地に滝頭小学校岡村分校が開校します。昭和30年代に入ると横浜市の人口は急激に増加し、岡村分校も校舎の増改築と新校舎の建設を行い、さらには遺跡をとどめる台地の一部を切り下げて校舎を広げる計画も持ち上がりました。そこで、和島誠一を中心^{しゆ}に2度の予備調査を経て、昭和36（1961）年に約10,000m²におよぶ台地の全面発掘が行われ、その結果、縄文・弥生・古墳時代の住居跡約270軒とともに多くの遺物が発見されました（第1図）。特に弥生時代中期後半から後期にかけての住居跡が多く、地域の拠点であったと考えられています（橋口2013・横浜市歴史博物館1998・2011）。

発掘調査の段階から既に遺跡保存の機運が高まり、その甲斐あって昭和41年に、遺跡の東側の一部は学校用地として削られたものの、大半を史跡として土中に保存することとし、国指定史跡となりました。翌昭和42年に、三殿台遺跡から出土した遺物を中心に、公開展示を行う展示室、遺物を収納する収蔵庫、弥生時代後期から終末にかけての住居跡6棟を発掘調査当時のまま見学することを可能にした、家形埴輪モチーフの住居跡保護棟、3つの時代の復元竪穴住居、その他の住居跡のうち何軒かを選び、擬木で縁辺部を囲って位置が分かるように表現するなどの整備を行い、横浜市三殿台考古館



第1図 発掘された三殿台遺跡（昭和36年撮影）

(以下、三殿台考古館)が開館しました(第2図)。なお、三殿台考古館の範囲は北側斜面で確認できる貝塚も含む約8,000m²です。

2. 三殿台考古館の概要とその活動

三殿台考古館は、平成18年度から財団法人横浜市ふるさと歴史財団(平成23年に公益財団法人横浜市ふるさと歴史財団に名称変更)が指定管理事業者として管理運営を開始し、平成26年3月現在、2期目の指定管理期間中です。

三殿台考古館の開館時間は、4月から9月が9:00～17:00、10月から3月は9:00～16:00です。休館日は毎月第三水曜日と、年末年始になります。入場料は無料で、開館時間中は自由に出入りが可能です。住所は横浜市磯子区岡村4-11-22と磯子区に所在しますが、前述のとおり、すぐ北は南区となる境界上に位置します。三殿台考古館に来館するためには、いくつかのルートがあります。ひとつは、JR根岸線の根岸駅もしくは磯子駅からバスを利用し、天神前バス停下車徒歩15分。もうひとつは横浜市営地下鉄西田駅下車徒歩20分、最後は京浜急行および横浜市営地下鉄弘明寺駅下車徒歩20分から30分です。弘明寺駅からは横浜市営バスが利用でき、三殿台公園バス停下車徒歩5分となります。しかし、このバスの運行状況は1時間に2本程度と決して多くはありません。施設内には乗用車を5台ほど止めることができるスペースがあります。

三殿台遺跡は、平成23(2011)年に台地全面の発掘調査から50年を迎えました。また翌24年は、三殿台考古館開館45年目でした。この間、横浜市三殿台考古館ではさまざまな調査・研究・普及活動や、文化財を次世代に継承するための施設の維持・管理に務めてきました。その概要について、三殿台考古館開館45周年記念パネル展の際、使用した年表を添付しますのでご参照ください(第1・2表)。現在の三殿台考古館における主な業務は、以下のとおりです。

- ①-1：三殿台遺跡から出土した土器や石器といった遺物の再整理や調査、写真資料や図面などのデータ化。



第2図 整備された三殿台遺跡



第3図 経常的な施設維持の様子

元号	西暦	月	できごと
明治	31年	1898	12月 藤田賀信による「岡村直留」の発見。
明治	32年	1899	3月 藤田、鳥居龍藏とともに踏査。5月、人類学会雑誌に報告。
明治	44年	1911	4月 第1次市域松原に伴い、御園ヶ原村から横浜市に編入される。
昭和	2年	1927	3月 岡村の切り通し開通。 10月 磯子区が誕生、第3次市域拡張。
昭和	5年	1930	5月 岡村の切り通しに高木(たかばし)が架かる。
昭和	28年	1953	8月～翌3月 横浜小学校岡村分校の竣工・校舎建設工事。 12月～翌3月 横浜小学校岡村分校の築立・期校舎建設工事(横浜木造2階建6教室)。
昭和	29年	1954	7月 横浜小学校岡村分校開校。
昭和	32年	1957	7月 横浜小学校岡村分校の校舎改修工事。2教室。
昭和	33年	1958	7月 横浜市教育委員会、学校用地として三殿台の台地を買収。 11月～翌3月 横浜小学校岡村分校の第2期校舎建設工事、中校舎木造2階建4教室。
昭和	34年	1959	9月 横浜市立大学史学研究室による「御園調査(第1次予備調査)」。
昭和	35年	1960	7月 横浜市教育委員会、横浜市立大学史学研究室による「御園調査(第2次予備調査)」。
昭和	36年	1961	7～9月 本格調査を実施。12月上旬まで休日を利用して追加調査を行う。 過冬の累上げ対策係在事業を実施。
昭和	37年	1962	3月 『横浜市三殿台発掘・整理調査報告』刊行。
昭和	38年	1963	1月 横浜小学校岡村分校、誕生して岡村小学校となる。 5月 三殿台遺跡保存対策協議会発足(昭和41年12月まで)。 9月 開墾・植木塀などの工事を実施。
昭和	39年	1964	1月 住居跡表示柱の設置・事を実施。 4～8月 住居跡保護地・考古展示館(復元示標)建設工事を実施。 4月～11月 岡村小学校鉄筋新校舎建設工事開始。鉄筋3階建6教室。
昭和	40年	1965	3月 『「廢台」横浜市磯子区三殿台遺跡調査報告』刊行。 露天版示標の保存処理実験を実施。
昭和	41年	1966	3月 先生・吉嶋時代の復元作業が完成。 4月2日 4～12月 11月～翌3月 『史跡』に指定される。 休憩所・トイレ・説明板などを設置し、復元整備をはかる。露出展示遺構の保存処理実施。 岡村小学校第2期校舎増築工事開始。鉄筋3階建6教室。
昭和	42年	1967	1月31日 11月～翌3月 人口減少分のクリート・鋪装工事・アスファルト歩道の鋪装工事などを実施。
昭和	43年	1968	3月 横浜時代復元化設営工事・岡村小学校人口減少分の設営設置工事・住居跡表示石柱のタイル貼り付け工事を実施。
昭和	44年	1969	2～3月 外周設置・解説工事・復元作業周辺歩道敷工事などを実施。
昭和	45年	1970	2～3月 考古別冊(復元再現)を発行。
昭和	47年	1972	7月 岡村小学校の授業造成に伴い、三殿台遺跡床瓦発掘調査。
昭和	49年	1974	12月～翌8月 横浜小学校内増築工事。音楽室・音楽室・理科室・職員室など。
昭和	51年	1976	2月 岡村小学校・近校舎解体(解塗)。 3月 北側1壁の解塗工事を実施。 7月 住居表示の実験に伴い、「竹橋」の字名が選択され、岡村4丁目になる。
昭和	52年	1977	2～3月 仮住居の解体を実施。
昭和	58年	1983	12月～翌3月 仮住居の解体を実施。
昭和	60年	1985	2月～3月 住居跡保護地内壁の解説工事を実施。
昭和	61年	1986	～翌2月 横浜市「殿台考古館内壁解説会員会」を5回開催。
昭和	62年	1987	3月 作業検討委員会『横浜市三殿台考古館再整備の基本方向について~報告~』刊行。 11月 北側壁の取扱説明会実施。清水代中期の山形が確認される。
昭和	63年	1988	8月～翌3月 横浜市三殿台考古館再整備基本計画策定委員会を設置し6回開催。
		9月～12月	トイレの水洗化工事を実施。

第1表 三殿台考古館の歩み①

- ①-2：三殿台考古館収蔵資料の常設展示などでの活用。
- ②-1：常設展示室や住居跡保護棟の維持と管理、来館者に対する展示解説。
- ③-1：磯子区開催のスタンプラリーや、横浜市開催の夏休み体験企画など他施設との連携、ホームページの更新や案内チラシの作製や配布を行う広報活動、遺物の再整理やガイドを行なうボランティア活動の推進、学校見学や館務実習などの受け入れ。
- ③-2：年間をとおして開催する体験学習事業。体験教室と呼称。
- ③-3：館内で行なうパネル展示などの開催。

元号	西暦	月	できごと
平成 元年	1989	3月	再整備基本計画を策定。株式会社システム研究所『横浜市三殿台考古館再整備基本計画策定調査報告書』を上梓。
		3月	三殿台遺跡発掘調査ビデオ「大音のムラを語るーを作成。
		4月	住居跡保護棟の保存処理の調査・研究を専門機関に委託。
		12月～翌3月	遺構表示石柱の改築工事を実施。
平成 2年	1990	2月～翌3月	横浜市三殿台考古館住居跡保護棟改築調査策定委員会を設置し、策定委員会を5回、作業部会を2回開催。
平成 3年	1991	3月	株式会社文化財保存協会『横浜市三殿台考古館住居跡保護棟改築調査報告書』を上梓。
		10月～11月	三殿台遺跡東斜面過溝の試掘調査。
平成 4年	1992	4月	財団法人横浜市ふるさと歴史財团が発足し、管理・運営を同時に委託。
			平成元年から2年に実施した調査に基づき、遺構の保存処理を実施。以後、住居跡保護棟のメンテナンスは専門機関に委託。
平成 8年	1996	5月～12月	復元住居の建設替えを実施。
平成 18年	2006	4月	指定管理者制度を導入。
平成 19年	2007	10月～11月	横浜市中央図書館にて、開館40周年記念「考古学講座—横浜の考古学と三殿台遺跡—」を開催。
		11月	横浜市歴史博物館にて、開館40周年記念「考古学講座—横浜の考古学と三殿台遺跡—」を開催。
		12月～翌1月	横浜市歴史博物館にて、開館40周年記念「横浜の遺跡屋—横浜の考古学と三殿台遺跡—」を開催。
平成 23年	2011	4月	展示室リニューアルオープン。
		4～5月	横浜市歴史博物館にて、特別展「大音のムラを語るー三殿台遺跡発掘50年ー」を開催。
平成 24年	2012		開館45周年

第2表 三殿台考古館の歩み②

③-4：土器片ペンダントや缶バッジの制作・販売。

④-1：三殿台考古館内の清掃・草刈り・樹木の剪定、復元住居・住居跡保護棟・展示室を良好な状態に保つための経常的な維持管理（第3図）。

今回の講座では③を中心に、平成24年度の企画普及活動事例を報告します。

3. 平成24年度の活動

年間をとおした活動

年間をとおした体験活動として、マイギリによる火起こし（1人100円）と（第4図）、5人以上で事前の電話予約が必要な勾玉作り（1人300円）を、常時受け入れています（なお、参加費は平成24年度時のものです。以下同じ）。火起こしは約30分間、勾玉作りは青石石と呼ばれる石を紙ヤスリで削って成形するもので、約2時間30分間のプログラムです。勾玉作りに人数の制限と電話予約を必要としているのは、活動時間が約半日間と長いため事前の調整を行なうためです。

遺跡の説明・展示解説は個人でも団体でも対応しています。解説時間については来館者の希望に沿うよう時間調整を行ないます。

三殿台考古館の広報活動は、チラシやホームページ、市広報などを利用して適宜行い、取材があればその都度対応します。

缶バッジ（1個100円）、土器片ペンダント（1個700円）を事務所内で販売しています。土器片ペンダントは、粘土を成形し焼き上げた自家製です。

次に、各月ごとの報告を行ないます。

4月



第4図 火起こしの様子

・主な活動内容

小学校6年生の歴史の授業に伴う遺跡見学の受け入れと、それに先立つ常設展示室の展示資料の入れ替え作業。遺物整理ボランティア（以下、整理ボラ）・遺跡ガイドボランティア（以下、ガイドボラ）活動の開始と研修。磯子区の施設間で行うスタンプラリー（いそびゴールデンウイーク）に参加をしました。

小学校6年生の学校見学の受け入れは、4月がもっとも多く（16校）、5月（10校）、6月（1校）につれて少なくなっています。1時間から2時間の滞在が多く、学校によってはお昼ご飯を食べる場合もあります。午前と午後に各1校ずつ受け入れて、三殿台考古館職員が解説を担当します。

・解説

整理ボラは、主に三殿台遺跡の発掘調査で出土し、収蔵庫に所蔵してある土器や石器など、遺物の再整理作業を目的とし、水洗・注記・接合などの、基礎整理作業を中心に行っています。

ガイドボラは、個人・団体を問わず、三殿台遺跡来館者に遺跡や展示室の説明を行う役を担っています。三殿台考古館でのボランティア活動の詳細は別途報告しています（橋口 2014）。

4月末からゴールデンウィーク中、磯子区内の施設間でスタンプラリーを開催しており（4月25日～5月6日）、三殿台考古館も例年参加しています。

5月

・主な活動内容

5月初めの連休中はゴールデンウィーク体験教室として火起こし（3日）・拓本取り（4日）・勾玉作り（5日）・石器作り（6日）を開催しました。火起こしのみ、荒天により中止としました。

・解説

ゴールデンウィーク体験教室は定員15人から20人の当日先着順で受付を行いました。本物の土器を使用した拓本取り（1人100円）。石器作り（1人300円）は、北海道の黒曜石を使用し、押圧剥離によって石鎌を作ります（第5図）。5日には磯子区のマスコットキャラクターである「いそび」も遊びに来てくれました。

6月

・主な活動内容

近隣の滝頭コミュニティーハウスの自主事業、「父の日プレゼント 勾玉キーホルダーをおとうさんへ贈ろう！」に協賛して勾玉作り（3日）。三殿台考古館と隣接する市立岡村小学校（以下、岡村小学校）のクラブ活動に講師として参加（12・19日）しました。

ボランティア研修として横浜市の埋蔵文化財センターの協力のもと、体験用に作られた竪穴住



第5図 石器作りの様子

居跡を調査する、発掘調査研修（23・24日）を行いました。

・解説

施設間連携として近隣施設との共催事業や講師派遣に対応するとともに、(公財) 横浜市ふるさと歴史財団内の連携も積極的に行ってています。

7月

・主な活動内容

三殿台遺跡で一晩を明かす、キャンプ in 三殿台を開催しました（21・22日）。

夏休み体験教室として、土偶作り（15・16日）、勾玉作り（26日）、火起こし（27日）を開催しました。

市立上大岡小学校（26・27日）、市立磯子小学校（31日）のサマースクール・西区北郷井沢子ども会の花火大会（30日）に火起こしの講師として参加しました。

キャンプ in 三殿台（テント一張り 2,000円）はテントや寝具、食材などを参加者が用意します。事前申し込みを必要とし、7月と9月に開催しました（第6図）。

・解説

夏休み体験教室は7月と8月の夏休み期間中に集中して行うもので、土偶作り（1人300円）は、事前申し込みを必要とします。これは都筑区の原出土遺跡から出土した筒型土偶を作成します。7月に行うのは成形で、8月に野焼きを行って完成です。

8月

・主な活動内容

三殿台考古館開館45周年記念パネル展「今と昔の三殿台」を開催しました（6日～31日）。

夏休み体験教室として土器作り（2日）、火起こし（4日・13日）、勾玉作り（5日・15日・24日）、拓本取り（6日・14日・28日）、野焼き（26日）、石器作り（29日）を開催しました。

横浜市教育委員会が主催する「子どもアドベンチャー2012」（23日）に参加しました。

大学生による館務実習生を1人受け入れました（4～7日、22～24日）。

三殿台考古館開館45周年記念パネル展は、開館当時やこれまで歩んできた三殿台考古館の歴史を写真パネルにし、屋外の休憩スペースを利用して展示しました（第



第6図 キャンプ in 三殿台の様子



第7図 パネル展示の様子



第8図 野焼きの様子

7図)。

・解説

夏休み体験教室のうち土器作り(1人500円)は1kgの粘土を使用して土器を作ります。事前の申し込みを必要とし、26日まで乾燥させて野焼きを行いました(第8図)。野焼きは土偶作りと合同で行っています。その他の体験は当日先着順で対応しました。

「子どもアドベンチャー2012」は横浜市内の小・中学生を対象とした体験学習を行うイベントで、市役所をはじめとした市内の様々な施設が参加しています。三殿台考古館では、午前中に火起こし、午後に拓本取りを行いました。開館45周年を記念して参加料無料で対応しました。

9月

・主な活動内容

パネル展「横浜から世界遺産を～金沢区の称名寺・朝比奈切通～」を開催しました(3日～30日)。

横浜市磯子図書館で、三殿台考古館開館45周年記念共催パネル展「ご近所のお宝！ 国指定史跡 三殿台遺跡」(9月20日～10月8日)を開催しました。区民祭である「磯子まつり」にあわせて、横浜市磯子図書館で展示解説を行いました(9月30日)。

開館45周年事業の一環として、開館時間を延長して、ダイヤモンド富士の見学会を行いました(9月26日～10月1日)。



第9図 横浜市磯子図書館での展示

キャンプin三殿台(2日)、秋の土器作り教室を開催しました(23・30日)。

岡村小学校の地域交流クラブに講師として参加しました(18日・25日)。

・解説

横浜市磯子図書館との共催パネル展は、8月に開催したパネル展の内容を中心としたものですが、収蔵資料の一部を貸出、展示しました。横浜市磯子図書館からは、図書館所蔵の関連図書の展示や、近隣の遺跡地図の作製など、協力して展示しました(第9図)。

ダイヤモンド富士見学会は、三殿台考古館の良好な眺望を活かして、富士山頂に夕日が沈むダイヤモンド富士を見学するもので、天候によって状況が大きく左右されるものの、年に2度あることから、9月と3月に行いました(第10図)。



第10図 三殿台遺跡から撮影した富士山

秋の土器作り教室(1人2,000円、粘土1kgにつき300円)は、高校生以上を対象とし、縄文から古墳時代に出土した本物の土器数点のうち、一点を選んでそれを観察して、粘土こね・成形・

磨き・焼成を行う全4回のプログラムです。9月は粘土こねと成形を行いました（第11図）。9月以降に行う体験教室は事前の申し込みをお願いしています。

10月

・主な解説内容

岡村小学校内で、創立50周年記念展示が始まり、校内所蔵の資料を展示しました（10月15日～11月10日）。

岡村小学校の地域交流クラブに講師として参加しました（16・23日）。6年生の土器作りに講師として参加しました（20・25日）。

整理ボラの整理作業への理解を深めるために、土器の接合研修を行いました（20日）。ガイドボラのガイド技術の向上のための研修を行い（21日）、ガイド内容の確認と共有、来館者の質問への対処などを検討しました。

秋の土器作り教室（4日・7日・11日）、古代人体验教室（14日）、秋の石器作り教室（28日）を開催しました。

・解説

三殿台考古館に隣接する岡村小学校が創立50年を迎えることから、学校の歴史について展示を行いうにあたり、その一角をお借りして、本校所蔵の土器・石器・貝や骨などを整理し、展示しました。また、クラブ活動や土器作りへの講師派遣といった活動も行っています。

古代人体验は親子で参加する体验教室です（親子1組500円）。貫頭衣を着て火起こしや弓矢打ちなどを行います。

11月

・主な活動内容

岡村小学校の地域交流クラブに講師として参加しました（20日・27日）。また、小学校6年生の土器作り（野焼き）を行いました（29日）。

秋の土器作り教室（野焼き）を開催しました（10日）。作成した土器を常設展示室に展示しました（11月17日～12月2日）。

・解説

秋の土器作り教室で完成した土器は、2週間程度常設展示室内で他の資料と同じように展示ケースの中で展示を行います（第12図）。

12月

・主な活動内容

三殿台考古館の来館者用リーフレットを作成しました。



第11図 秋の土器作り教室の様子



第12図 秋の土器作り教室 土器展

勾玉・拓本教室を開催しました（16日）。

・解説

来館者用に配布するリーフレットを新しいものに変更しました。勾玉・拓本教室（1人400円）は、1回の体験で勾玉作り・拓本取りを行います。

1月

・主な活動内容

冬の土器作り教室を開催しました（13日・20日・27日）。

リーフレットを近隣施設や市域南部の小中学校に送付しました。

・解説

冬の土器作り教室は1月中に磨きまで行います。

2月

・主な活動内容

市内中学校の職業体験が行われました（5日）。

冬の石器作り教室（24日）を行いました。

体験学習参加者用の貫頭衣を作成（2月8日・13日、3月2日・7日）。冬の土器作り教室野焼きのための薪割り（21・22日）。次年度計画の事業である釣り針作りについて、鹿角で試作（27日）を行いました。

・解説

体験教室の準備は年間をとおして行われます。また、年度末も近いことから次年度の体験教室に関する準備なども行いました（第13図）。

3月

・主な活動内容

冬の土器作り教室野焼き（3日）、作品展を展示室にて行いました。（9～24日）。

市立本町小学校放課後キッズクラブの石器作りを支援しました（23日）。

開館45周年事業の一環として、開館時間を延長して、ダイヤモンド富士の見学会を行いました（13～17日）。

・解説

冬の土器作り教室の野焼きと作品展が終了し、年度内の体験教室はすべて終了しました。



第13図 鹿角の加工の様子

4. おわりに

今回は、体験教室やパネル展示など、三殿台考古館への来館者が直に体験する事業を中心に報告させていただきました。近隣小学校や施設との協力関係を強めることを念頭に置き、それを事業に活かすよう活動を行ってきました。今後もその方向性を進めることで、地域に根差した史跡になるのではないかと考えています。

引用・参考文献

橋口 豊 2013 「大地の1頁 横浜の台地に眠る大集落～三殿台遺跡～」『考古かながわ』第49号

橋口 豊 2014 刊行予定「三殿台考古館におけるボランティア活動報告」『横浜市歴史博物館紀要』第17号

横浜市歴史博物館 1998 『横浜発掘物語一日で見る発掘の歴史』

横浜市歴史博物館 2011 『大昔のムラを掘る—三殿台遺跡発掘50年—』

横浜市三殿台考古館

住所 横浜市磯子区岡村4-11-22

TEL 045-761-4571

FAX 045-761-4603

HP

<http://www.rekihaku.city.yokohama.jp/shisetsu/sandd/>



東村山市における遺跡の保存と活用

下宅部遺跡について

千葉 敏朗（東村山ふるさと歴史館）

はじめに

下宅部遺跡は東京都東村山市多摩湖町から発見された、縄文時代の漆工関連資料が豊富に出土したことで全国的にもよく知られた低湿地遺跡である（第1図）。特に縄文時代の資料としては初めてウルシ樹液採取の傷が確認されたことや、様々な漆を調整加工するための容器、漆塗りの弓などの製品、漆で補修した土器など、一連の漆工作業の様子を知ることができる点が評価されている。

遺跡の本調査が1996年から始まり、初期段階から遺跡の保存が検討された。事業主及び土地所有者が東京都であったためもあり、遺跡の一部保存に漕ぎ着くことができた。その後、市民参加による公園整備がなされ、2004年に遺跡公園「下宅部遺跡はっけんのもり」として開園した。2009年には公園の近くに、下宅部遺跡出土品の収蔵展示施設兼体験学習施設として「八国山たいけんの里」が開館している。

開園以来、遺跡公園「下宅部遺跡はっけんのもり」の除草・清掃は市民ボランティアとの協同で行っている。また、遺跡公園を舞台とした主な活動としては、5月の連休と秋の文化の日を挟んだ東京文化財ウィークの2回、縄文体験をメインとしたイベントを行っている。他に、秋から冬の間に体験事業「縄文土器教室」などで作成した上器の野焼きを行っている。「八国山たいけんの里」では下宅部遺跡出土資料を常設展示しており、イベントのある時には市民ボランティアによる展示ガイドを行っている。

今年の5月には「下宅部遺跡はっけんのもり」の10周年、「八国山たいけんの里」の5周年を迎える。実はこれまでやってきたことについて、ちょっと違っていたのではないかと、今見直しをしているところである。地域博物館にとって「遺跡の活用」とは本当はどこにあるのだろうか。

1. 保存までの経緯

下宅部遺跡は都営住宅の建替えによって発見された遺跡である。建替え計画が持ち上がった段階では対象地は周知の遺跡ではなく、遺跡地図にも掲載はされていなかった。ただし、武藏野台地では稀な縄文時代晩期の住居跡が出土した日向北遺跡や、瓦塔出土地に隣接していることから、東京都住宅局との協議の上で1995年に試掘調査を行うこととなった。その結果、大量の木材や堅果類などの有機質資料とともに縄文時代や古代の遺物がまとまって出土し、縄文時代後期から奈良・平安時代にわたる複合遺跡であり、かつ非常に重要な低湿地遺跡であることが判明し、本調査に至ることとなった。

本調査は1996年8月から2003年3月まで、途中に若干の中断はあったものの約6年をかけて

行った。その初年度、1996年度の調査成果をもとに遺跡保存の可能性が検討され、1997年6月の東村山市遺跡調査会役員会で、下宅部遺跡の一部保存についての要望書を東京都住宅局に提出することが決議された。その後、東村山市文化財保護審議会や東村山郷上研究会などから遺跡保存に関する要望書や請願書が東村山市に対して出され、これらを受けて1998年11月、東村山市長から東京都知事へ正式に下宅部遺跡の保存要望が提出され、一部保存が確定した。

また、出土資料の取り扱いについての要望書も下宅部遺跡調査団から東村山市に対して出されており、糸余曲折はあったものの、最終的に「八国山たいけんの里」が建設され、出土資料が収蔵・展示されるに至っている。

こうした動きはまだ遺跡の発掘が続けられていた最中のことであったが、その背景にある要因として、下宅部遺跡の重要性について速報的に情報発信を続けたことがあげられる。要所々々で現地説明会を開催した他、小中学校の社会科見学は勿論のこと、団体や個人の見学についてもほぼ全て対応していた。また、調査中の1997～2002年度の6年間は、その年度の2月までの調査成果を3月末にフルカラーの調査概要報告書として刊行したことが、遺跡の周知に大きく貢献したものと思われる。現地説明会などでも当日資料の配布とともに調査概報の頒布も行き、最初の1997年度版は第3版まで増刷した。短期間での調査概報の刊行が可能であったのは、今では普通に行われているパソコンのDTPソフトによる完全原稿での入稿を行ったことと、ようやく実用に耐える性能に達したデジタルカメラの導入によるものである。

2. 保存区域（第2図）

保存区域には川の本流と丘陵からの支流の合流点が含まれており、部分的なトレンチ調査による状況把握でも下宅部遺跡の最重要地点に想定された場所であった。発掘調査をすれば様々な遺構遺物が大量に出土することが予想されたが、保存方法として選択したのは「埋没保存」である。全面的な調査は行わず、地下に遺構遺物が埋まつたままで保存することとしたのである。

よく言われるように、開発に伴う全面的な発掘調査は、それ自体が遺跡の破壊である。遺跡を破壊しながら情報を収集し、報告書に記録する。調査の後に残るのは、空っぽになった遺跡と報告書と出土遺物である。特に下宅部遺跡の場合は、河原を利用した低湿地遺跡という特殊性もあり、発掘調査してしまっては空っぽになった川の凹みしか残ないので、調査後の保存ではほとんど保存の意味をなさない。遺跡を有意義に保存し、未来に託すためには「埋没保存」しかなかったのである。

また、埋没保存は調査をせずに遺跡を保存するため、調査面積を縮小するという側面を持つ。それは調査期間の短縮と費用の削減に直結する。下宅部遺跡では最重要地点を保存地区としたが、仮にここを発掘調査した場合、調査期間は約2年を要するであろうとの予測であり、費用は2億円以上になると試算されていた。東京都住宅局の当初の設計ではこの保存区域にも住棟の建設が予定されていたため、初めは遺跡の保存に難色を示していた。しかし、協議を続ける中で遺跡の一部保存に応じたのも、そういう側面を考慮した部分があったのだろうと思われる。

下宅部遺跡の調査が始まった1996年はまだバブル経済の末期であり「費用はいくらかかってもいいから早く終わらせて欲しい」という雰囲気があった。発掘調査に4年間、資料整理に4年間の計画が立てられた。しかし、バブルが弾けた後は年間予算が縮小に次ぐ縮小で、2000年は作業員や重機を維持できず、10ヶ月間発掘調査を中断して整理作業のみを行わなければならなくなり、結果として調査期間も6年間に延びることになった。

さらに時代的な変化の中で、都営住宅の建替計画の全体的な方針にも修正があったと思われ、調査終了後に建設された住棟の数はさらに1棟が減になっており、現在は緑地となっている。そこには中世の石敷造構が広がっていた地点であったので、緑地にするのであれば保存のための相談をしてもらえたかったことが悔やまれる。さらに川の対岸の別の建替予定地区は、取り壊しの後、今もって更地のままとなっている。

3. 遺跡公園「下宅部遺跡はっけんのもり」の整備計画

遺跡の保存区域をどのように整備し活用していくかは、文化財担当所管であるふるさと歴史館が中心となって、市民参加で取り組みが始められた。

2000年10月から「下宅部遺跡公園づくりワークショップ」が月1回全12回にわたって開催された。下宅部遺跡そのものや、遺跡周辺の文化財や自然について学習し、先行する遺跡公園の視察を行いながら、下宅部遺跡の特徴を踏まえて以下のコンセプトがまとめられた。

- ・水を使った体験学習ができる公園
- ・ドングリが拾え、原始、古代の料理体験ができる公園
- ・野焼きや土器づくりができる公園
- ・縄文時代や古代の遺跡の様子がわかる公園
- ・イベントやガイド、公園管理をボランティア中心の市民参加で行なう公園
- ・市北西部の水と緑と文化財のネットワーク上に位置付けられる公園

これらを具体化したのが第3図「遺跡公園基本構想図」であり、以下はその説明である。

- ・湧き水を利用した「復元河道（水路）」
- ・縄文時代の川の流れを模した「復元河道（園内通路）」
- ・池状遺構を復元した「復元池状遺構」
- ・出土植物遺体を基にした「縄文の森（縄文時代の植生復元）」と「シンボルのクリの木」
- ・火おこしや土器の野焼きなどを行なう「体験学習ひろば」と「体験学習・休憩用河原」
- ・遺跡の概要と市民参加による計画であることを伝える「案内板・説明板」
- ・学校の社会科見学を想定しての「トイレ」

この基本構想を基に、ワークショップメンバーが中心となって最終的に「下宅部遺跡はっけんのもりを育てる会」という名称になる組織を立ち上げ、東京都から委託を請けた設計事務所と協議をしながら第4図「基本設計 烏瞰図」、第5図「公園整備工事 一般平面図」、第6図「公園整備工事 植栽平面図（高木）」にまとめていった。この間も月1回のペースで勉強会や視察を繰

り返し、開園に向けたソフト面の検討が続けられた。そして、2004年2～4月に整備工事が行われ、5月22日に開園を迎えた。若干の修正はあるものの、できあがった公園は市民がまとめた構想に沿ったものとなっている。この間の展開については『下宅部遺跡II』第7章「市民と地域博物館による遺跡公園づくり」(2006石川)に詳しいので参照していただきたい。

4. 遺跡の活用

遺跡を保存しそれを活用しようとした場合、ほとんどは遺跡公園の形を取る。そこにガイダンス施設や体験学習施設が付随することも多い。その活用法としては、学習系・イベント系・観光資源系などが考えられる。

しかし、観光資源系は三内丸山遺跡や吉野ヶ里遺跡などの別格に有名な遺跡でかつ復元施設が充実していなければ成立しない。堅穴住居や掘立柱建物などの元は立派であった復元施設が、それを魅力的に維持することが困難となり、うらぶれたようになってしまったのはよく目にする光景である。

イベント系は遺跡公園でよく行われている。その遺跡の時代に即したイベントが催され参加者たちが集まってくる。多くの参加者が集まり、楽しく過去の疑似体験をしてもらえばイベントは成功である。教育委員会や博物館施設が主催する場合、そこに必ず「学習効果」という思考が含まれる。しかし、イベント参加者にとって一過性の体験が学習になるだろうか。

「下宅部遺跡はっけんのもり」でも年に2回、5月と11月に縄文体験イベントを行っている。5月は当初、開園日である5月22日前後の土曜か日曜に行っていたが、八国山たいけんの里が5月2日にオープンしてからは両者を併せてゴールデンウィークに設定し直した。11月は東京文化財ウィーク参加事業として3日の文化の日前後に行っている。

内容は火おこしや石皿と磨石でドングリを漬す体験を中心で、昼には縄文紙芝居を見てもらいながら縄文スープを振る舞う。他にその時々でアンギン編みや土器ベンダントづくり、縄文カルタなどを行うこともある。いずれも縄文時代に絡めた設定にしてあり、弓矢体験もたいけんの里が開館して移行するまでは「下宅部遺跡はっけんのもり」で行っていた。

開園以来、こうしたイベントの対象は親子連れを想定して行ってきた。子どもが体験するのを親がサポートする。子どもだけの場合はボランティアがサポートする。メインは子どもであった。実際に訪れる参加者の子どもの年齢層は低く、小学校低学年以下がほとんどである。低年齢の子どもにとっては、こうした体験イベントはただの遊びにしかすぎない。遺跡公園で行っても普通の公園で行っても差があるとは思えず、付き添っている親にしても、興味を示すことはあってもそれ以上はなく、その時が過ぎれば忘れてしまうといった状態である。

もう一つのイベントが土器の野焼きである。現在は野焼きができる場所がほとんどなく、遺跡公園ならではの機能といえるが、年に2回程度では有効活用といえるのかは微妙である。野焼きの前提として土器を作る縄文土器教室がある。これも「親子縄文土器教室」とすると子どもは低年齢層になってしまう。大人の場合は出土土器を見本にして作る設定が可能だが、低年齢層の子

どもにはただの粘土遊びにしかすぎない。

しかし、イベント系はそれで充分に意味を持っている。一度でも現地に足を運び、その場所、その遺跡公園の存在を知ってもらえさえすれば、目的は達しているといえよう。

継続的な遺跡の活用は、やはり学習系に帰結すると考えている。大人の生涯学習や学校への出前授業など、遺跡をきっかけとして地元の歴史に興味をもってもらうところにある。そのためには担当者が調査研究を続け、遺跡の魅力、おもしろさを伝えていくしかない。下宅部遺跡の場合、漆工関連資料に特化した報告書『下宅部遺跡IV』の作成や、国立歴史民俗博物館との共同研究の中で新たな発見があり、それを講演会や講座で話し、またガイドボランティアさんに伝えて来館者への展示説明に反映させてもらっている。そうした学習をした上で遺跡現地に行くと、川と遺跡の関係などの立地や、植えられている樹木の種類が意味するところなど、何もないただの公園が遺跡として意味をもってくる。

引用・参考文献

下宅部遺跡調査団 2006 『下宅部遺跡I』『下宅部遺跡II』

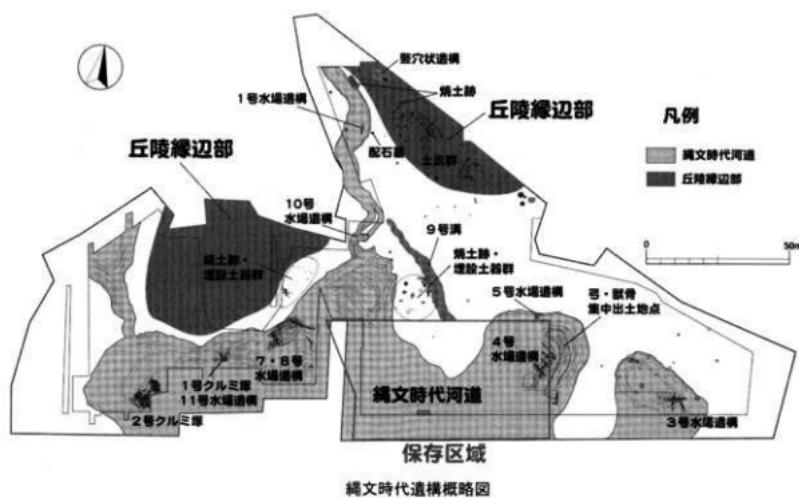
千葉敏朗 2009 『縄文の漆の里 下宅部遺跡』新泉社

東村山市教育委員会 2013 『下宅部遺跡IV 漆工関連資料調査報告書』

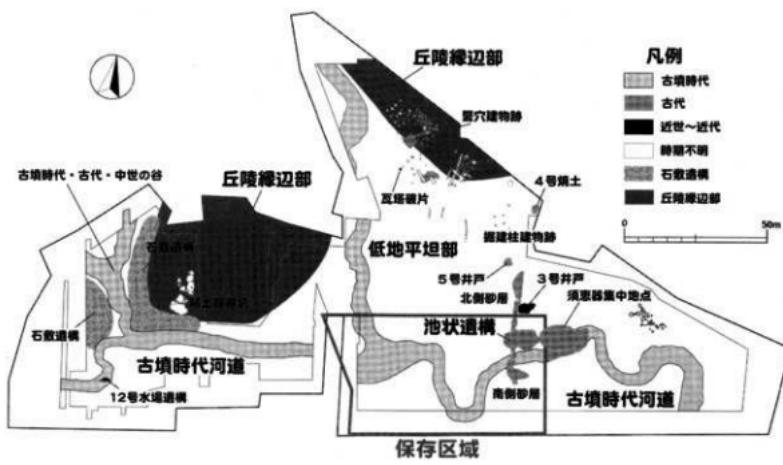
工藤雄一郎・国立歴史民俗博物館編 2014 『ここまでわかった！縄文人の植物利用』新泉社



第1図 下宅部遺跡の位置

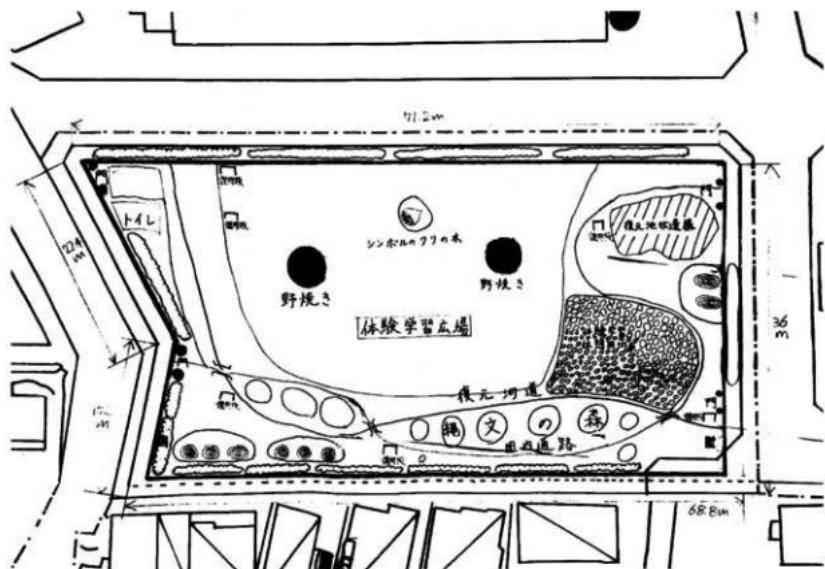


縄文時代遺構概略図

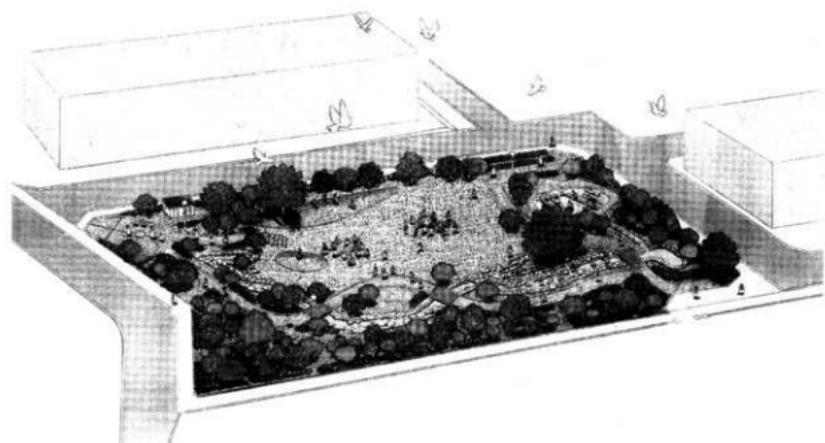


古墳・古代遺構概略図

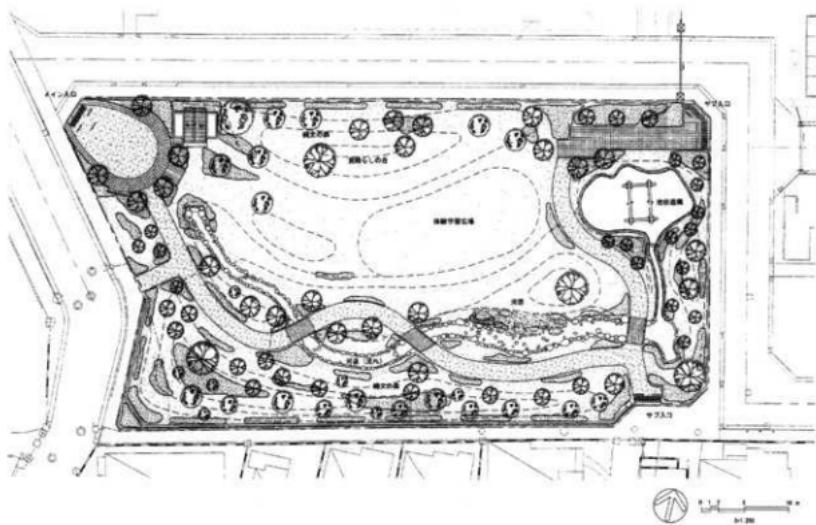
第2図 保存区域



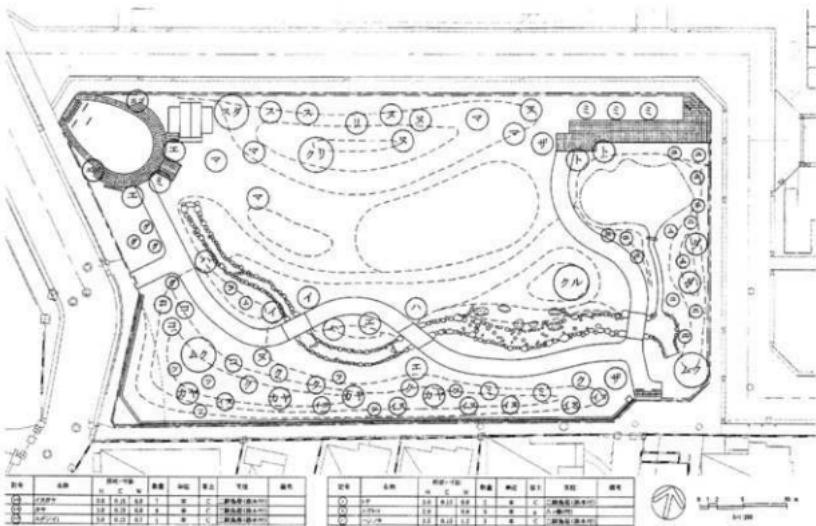
第3図 遺跡公園基本構想図



第4図 基本設計鳥瞰図



第5図 公園整備工事 一般平面図



第6図 公園整備工事 植栽平面図（高木）

鎌倉市・国指定史跡永福寺跡の整備

～史跡指定から整備までの半世紀～

小林 康幸（鎌倉市教育委員会）

○はじめに

鎌倉市二階堂に所在する国指定史跡永福寺跡は、源頼朝が鎌倉幕府を開いて間もない建久年（1194）に建立した寺院の遺跡である。頼朝は奥州藤原氏との戦（奥州合戦）で平泉に赴いた際、毛越寺、中尊寺二階大堂、無量光院、觀自在応院などの莊厳な伽藍に感銘を受けたようで、その後、鎌倉に戻ると合戦における戦没者の鎮魂を目的として永福寺を建立したのである。

鎌倉市内には史跡永福寺跡を含め国指定 31 件、県指定 2 件、市指定 9 件の合計 42 件の史跡がある。永福寺跡の史跡整備は鎌倉市で初めての史跡整備事業である。ここでは永福寺跡の史跡指定から整備までの半世紀を簡単に紹介することとしたい。

○史跡指定から整備にいたる経過

昭和 41 年（=1966）	国指定史跡に指定（指定面積：約 87,000 m ² ）
昭和 42 年～	史跡指定地内の用地買収開始（現在も継続中）
昭和 53 年	国指定史跡永福寺跡保存管理計画策定
昭和 56 年	試掘調査実施
昭和 57 年	史跡永福寺跡保存整備委員会発足
昭和 58 年	国指定史跡永福寺跡整備基本計画策定⇒発掘調査の対象範囲を決定 環境整備事業にともなう発掘調査実施（～平成 8 年までと平成 19 年）
平成 9 年	国指定史跡永福寺跡保存整備基本計画策定⇒具体的な整備範囲や方法を決定
平成 9 年～	整備工事を開始（※準備的な整備工事。平成 22 年まで）
平成 20 年	史跡追加指定（追加指定面積：約 400 m ² ）
平成 22 年	整備方針の方向転換
平成 23 年	本格的に史跡整備工事を開始
平成 28 年（=2016）	第 1 次整備完了、整備地の仮オープン（予定）

○発掘調査の概要

史跡をどのように整備するかを決めるためには、まず発掘調査を実施して遺構の状態を明らかにすることが必要となる。史跡永福寺跡の発掘調査は、昭和 56 年度に試掘調査を実施し、史跡内各所における遺構の保存状態とその埋没深度等の確認を行った。昭和 58 年度から平成 8 年度にかけて 14 年間にわたって継続的に実施した発掘調査（合計調査面積：約 16,000 m²）によって、永福寺跡の遺構の全貌を明らかにすることができた。その結果、二階堂（永福寺本堂）、薬師堂、阿弥陀堂、南北二つ

の複廊、南北二つの翼廊、釣殿などの建物跡や苑池、橋、取水口、鍾水、滝口、中ノ島などの庭園遺構、さらに経塚など多数の遺構が良好な状態で発見された。これらの遺構は創建以降、3回の大きな火災に遭い、そのたびに再建・修理が行われていたことが判明し、応永12年（1405）の火災で焼失して再建されなくなるまで、4時期にわたる遺構の変遷（図面のⅠ期～Ⅳ期参照）が明らかになった。さらに平成19年度の追加調査では、三堂の西側の山裾において、水路の遺構を確認した。

出土遺物はそのほとんどが永福寺の屋根に葺かれていた瓦である。瓦も分類をしてゆくと、遺構の変遷に合致するかたちで年代別に4時期に分類することができた。瓦のほかには、寺院遺跡を特徴づける遺物として、仏像の宝冠金具や堂の須弥壇などの手すりに使われたとみられる飾り金具、幡の吊り金具などの貴重な遺物が出土している。経塚から出土した一括遺物は、神奈川県の指定重要文化財に指定されている。

○史跡整備の検討・準備

発掘調査の成果に基づき、どのように史跡を整備するかという整備計画の策定は、各分野（考古学、歴史学、建築史学、庭園学、地質学、植生学など）の専門家で組織した史跡永福寺跡整備委員会において、国（文化庁）、神奈川県教育委員会の指導・助言を受けながら進めている（後には、地元住民の代表も参加）。最初の検討は4期わたって変遷する遺構のうち、どの時期の姿に永福寺跡を整備するかということであった。最終的に創建期（Ⅰ期）の姿に整備を行うことに決定した。

当初、平成9年度に整備基本計画を策定した時点では、史跡整備のシンボルとして中門を含む南北の各翼廊建物を復元することになった。建物復元の前提として、復元計画のない三堂、複廊及び釣殿を含めた建物群全体について3通りの復元案（堂舎復元図のA～C案参照）を作成し、検討を行った。最終的に史跡整備の早期完了や整備にかかるコストの縮減を主たる理由として、翼廊建物の復元は実施しないこととなった。これにより建物跡の整備は三堂については基壇を、それ以外の複廊、翼廊、釣殿については礎石による遺構表示と周囲の雨落ち溝を表示する整備となった。特に三堂の基壇は、永福寺跡の遺構で最も特徴的であった創建期の木製基壇によってその外装を復元することとし、基壇の復元は伝統的な工法である版築工法によって行うこととした。

苑池の復元については、三堂の堂前となる西側の汀線を州浜（石敷き）によって整備し、用地の未買収により汀線が表示できない箇所については暫定的に板柵の護岸によって整備することとした。

○整備工事の実施

遺構の復元整備工事は策定した整備計画に沿って順次、実施されるが、史跡整備が通常の公園整備などと大きく異なる点は、発見された遺構の保護を図ったうえで、遺構上の原位置に原寸で遺構を復元する点にある。遺構は必ずしも平坦ではないため、特に永福寺跡の庭園遺構では保護すべき景石が、整備のレベルに露出してしまう箇所もある。施工に際しては、かなりの頻度で現場立会を行って遺構の保護に努めている。また、本来は池中にある中ノ島も周囲を植生保存地区としたことから、暫定的に芝張りによって石組の劣化を防止している。

○整備に向けての普及啓発活動

昭和 58 年度から平成 8 年度までの発掘調査実施期間中は毎年、発掘調査現場の説明会を開催した。参加者は年々増加し、多い時には 700~900 名ほどの参加者が現場訪れ、盛況であった。

平成 6 年（1194）には、「シンポジウム浄土庭園と寺院・永福寺創建 800 年記念」を開催した。このシンポジウムは、永福寺跡の発掘調査成果を市民及び研究者に紹介し、遺跡への理解を深め、歴史的遺産としての重要性について周知を図ることを目的としたものである。折しもこの年は永福寺が創建された建久 5 年（1194）から 800 年となる節目の年であった。2 日間のシンポジウムに合わせ、出土遺物の展示会も開催した。当時、会場に展示した永福寺の復元模型は多くの見学者の注目を集めた。

整備工事の開始以降も現場見学会を開催し、整備工事の状況を一般の方々に見ていただき、史跡整備への理解を図っている。昨年度の見学会では、整備工事の途中にしか見ることのできない作業（堂基壇の版築工法など）を見ていただく機会を設けた。参加者の関心は予想以上に大きなものであった。

○史跡整備の今後の課題

史跡永福寺跡の整備事業は、平成 27 年度末までに第 1 次の整備工事が完了し、整備地は平成 28 年春に一応、仮オープンを迎える予定である。それ以降の整備については、次のような課題がある。

- ① 整備予定範囲の未買収地の買収
- ② 便益施設（トイレ等）の設置
- ③ ガイダンス施設（=資料館）の設置
- ④ 買収完了範囲での継続整備（指定地東側の山稜部に所在する経塚等）
- ⑤ 整備後の公開エリアの適正な維持管理

○おわりに

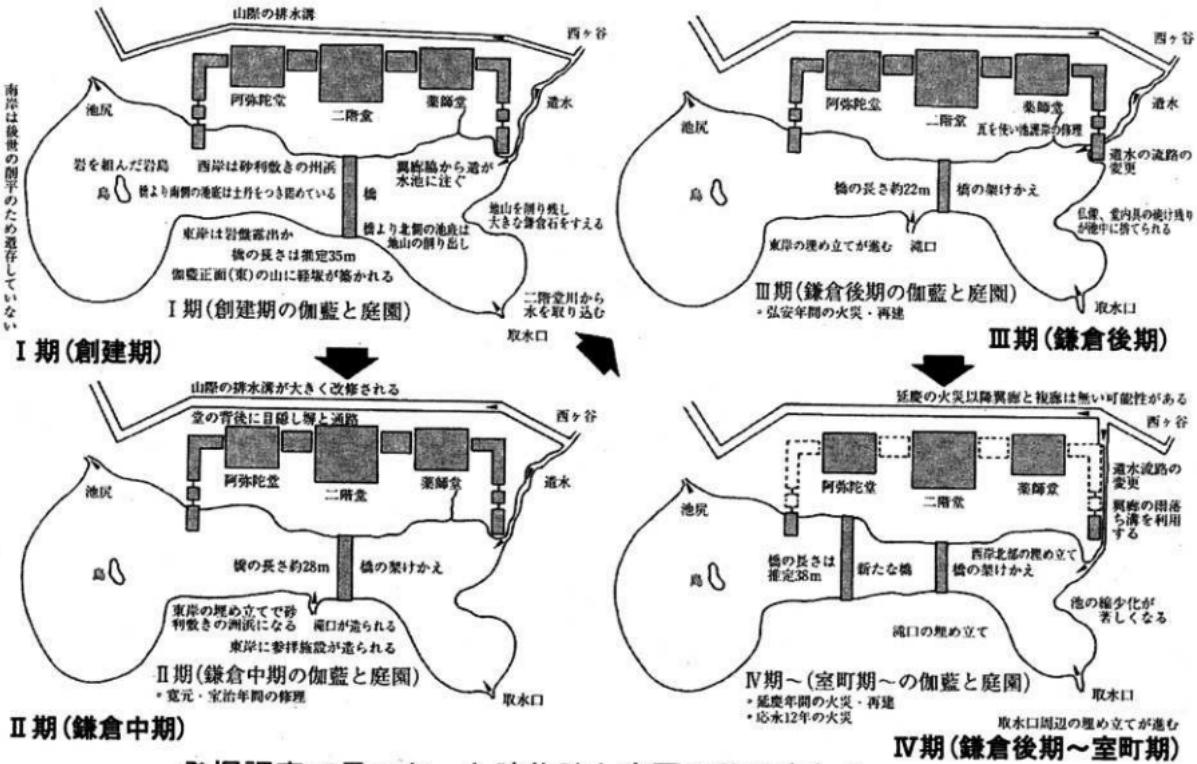
史跡永福寺跡の整備は鎌倉市で初めての史跡整備である。整備前に住民説明会の場で、あれこれと説明するよりも整備後に現地で具体的な整備の状況を見ていただくと、史跡整備は比較にならないほど理解されやすい。史跡永福寺跡の整備もすべてが完了したわけではなく、これに続く 2 番目の史跡整備についても将来像を描かなければいけない時期を迎えている。鎌倉市が史跡整備を進める次の候補としては、史跡指定地の買収事業がある程度、進んでいる史跡鶴岡八幡宮境内の御谷地区（鶴岡二十五坊跡）、史跡北条氏常盤亭跡、史跡東勝寺跡などがある。鎌倉市で最初の史跡整備事業である史跡永福寺跡の整備が市民や鎌倉を訪れる方々からどのような評価を受けるかが、今後の史跡整備にとって大きな鍵となる。「整備して良かったね」と言つていただけるような史跡整備を今後もめざしていきたい。

○引用・参考文献（挿図の多くはこれらを出典としています）

鎌倉市教育委員会『国指定史跡永福寺跡保存管理計画書』昭和 53 年

鎌倉市教育委員会『国指定史跡永福寺跡整備基本計画書』昭和 58 年

鎌倉市教育委員会『国指定史跡永福寺跡保存整備基本計画』平成 9 年



発掘調査で見つかった建物跡と庭園の移り変わり

図1 遺構の変遷図

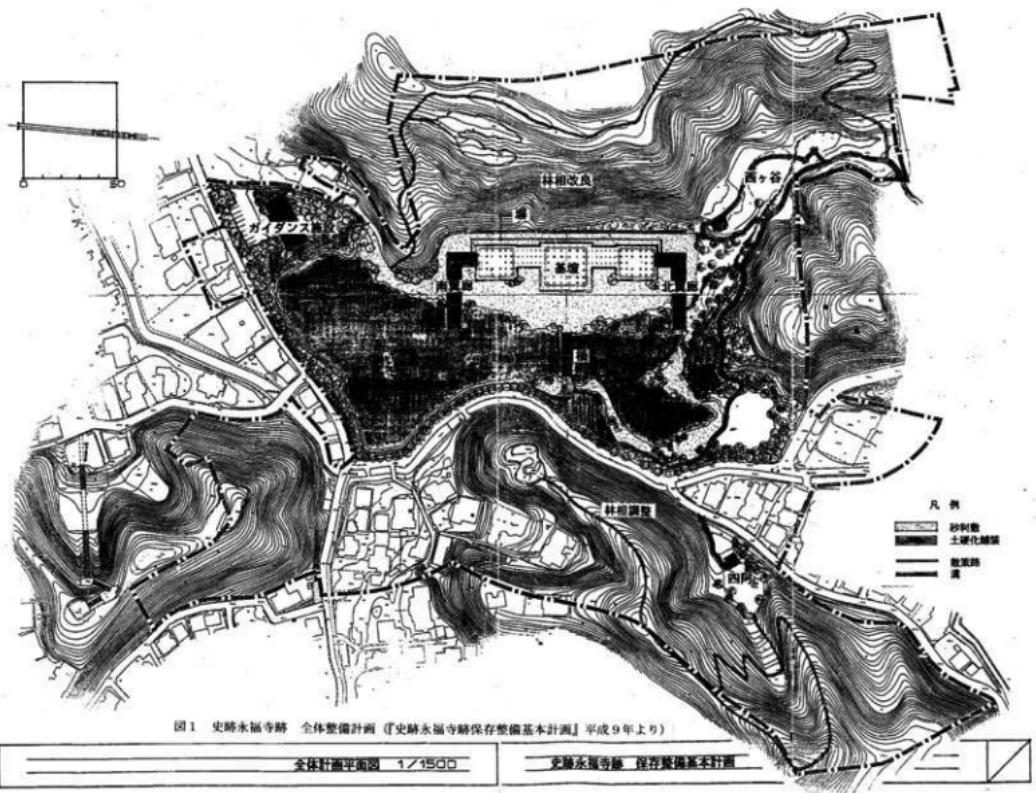


図1 史跡永福寺跡 全体整備計画 (『史跡永福寺跡保存整備基本計画』平成9年より)

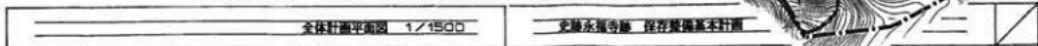


図2 全体整備計画図

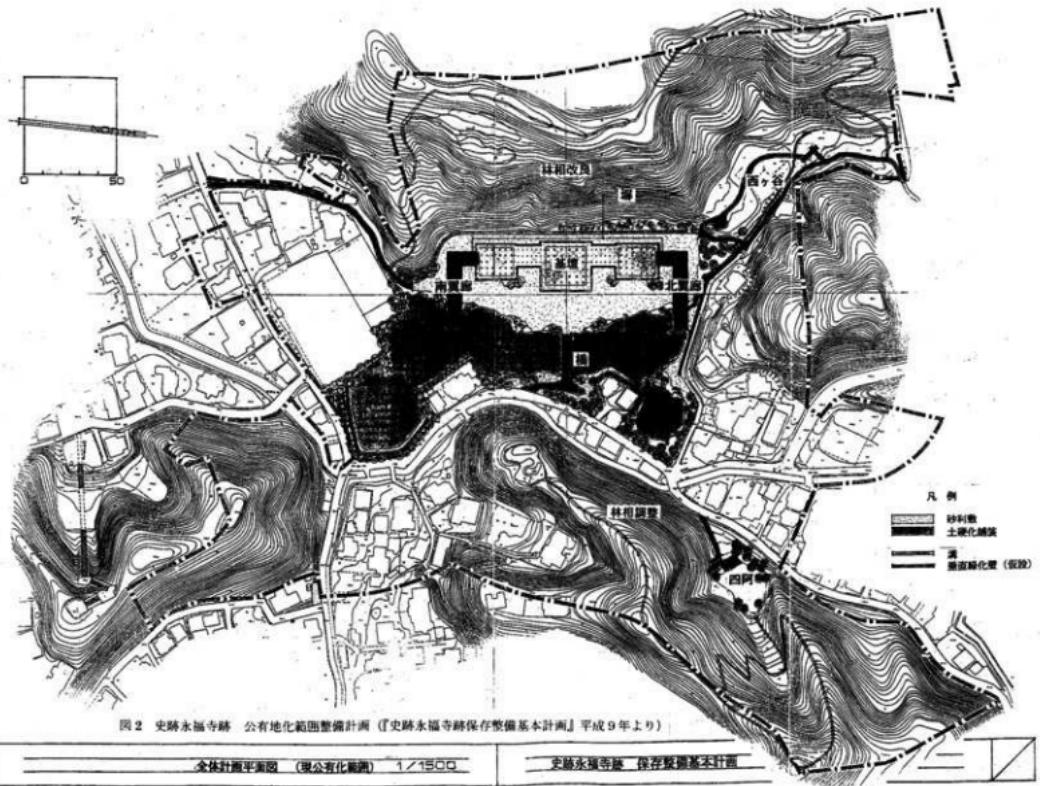


図3 公有地化範囲整備計画図

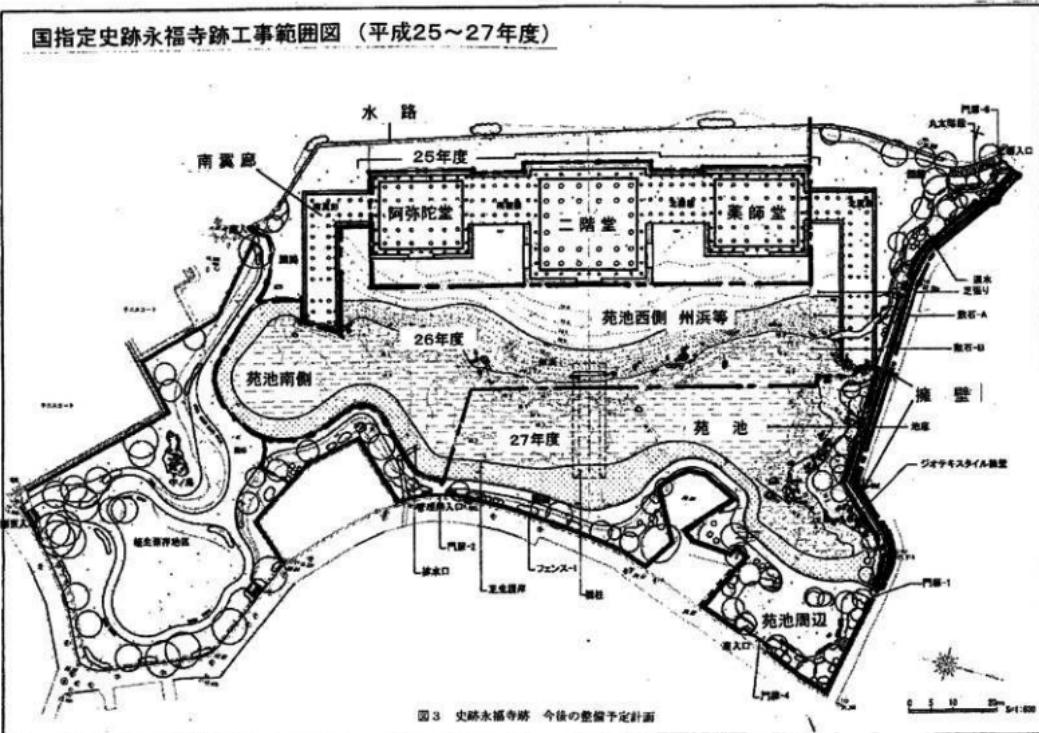


図4 今後の整備計画図



図5 三堂基壇の整備工事中（平成24年10月）

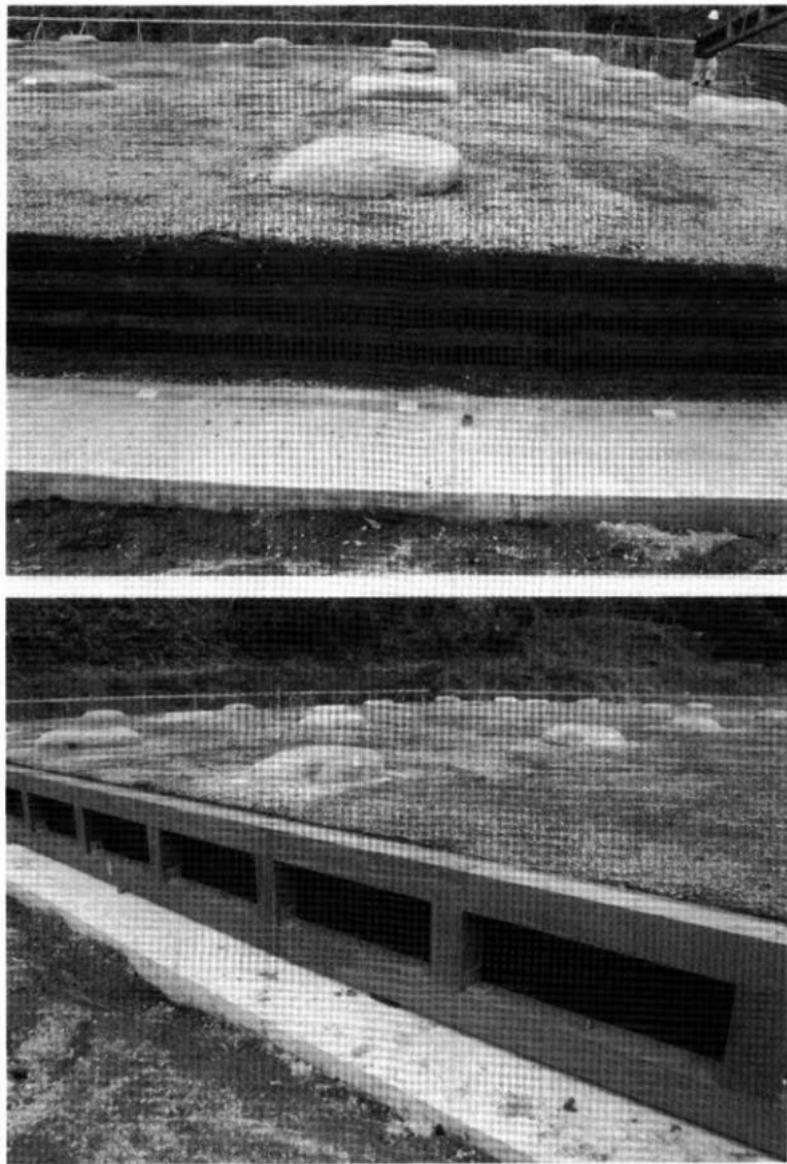


図 6 基壇の版築と外装

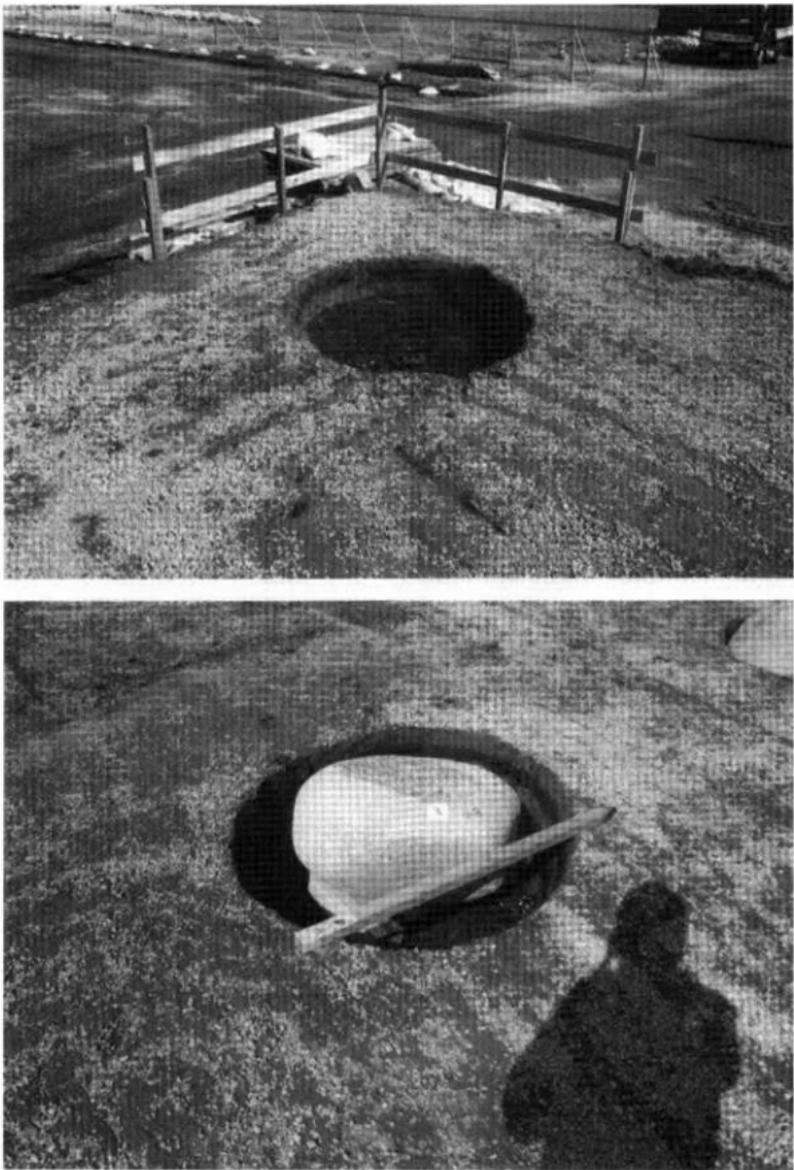


図7 基壇への礎石据え付け

史跡・天然記念物 旧相模川橋脚に見る保存と活用について

～「時空の交差点」をどのように伝えていくか～

茅ヶ崎市教育委員会 大村浩司

はじめに

遺跡の保存と活用については、本講座の趣旨にも述べられているようにテーマとしては新しいものではないが、常に取り組んでいかなければならない課題と言える。

茅ヶ崎市には 1926 年(大正 15)に県内で 6 番目として指定を受けた史跡旧相模川橋脚が所在しているが、2001 年(平成 13)より保存整備事業が進められ、2008 年(平成 20)春に完了し公開されている。この保存整備事業を通じて、当時の研究者、行政、地元などの関係者が携わった保存と活用にかかる足跡を知ることができたが、こうした中には、現在のわれわれが遺跡の保存と活用に取り組む場合に参考になることが多いと思われる。ここでは、旧相模川橋脚における保存と活用の歩みについて振り返り、今後の保存と活用の一助としたい。また、合わせて「記録保存」された遺跡に対する保存と活用について、その現状と課題について考えてみたい。

旧相模川橋脚の概要

本史跡は、神奈川県茅ヶ崎市南西部の下町屋一丁目に所在するもので、指定地面積は 1,879.53 m² と決して広くはない。地形的には茅ヶ崎市南部に形成されている沖積地にあたり、本地点は旧河道部分に該当する。本史跡は 1923 年(大正 12)に発生した関東大震災によって、当時水田だった地表へ出現したもので、歴史学者沼田頼輔博士によって、1198 年(建久 9)に源頼朝の家臣、稻毛重成が亡き妻の供養のために相模川に架けた橋の遺構と考証された。そして、出現から 3 年後の 1926 年に国の史跡に指定されている。2001 年より実施された保存整備に伴う発掘調査では、橋脚について本数は 10 本で規則的に配置



仮指定後の橋脚（大正 14 年頃）

されていること、使用されている木はヒノキで径 48~69 cm の太さであること、先端は尖った形をしており一本ずつ単独に設置されていること、などが確認された。橋脚の北側からはあらたに厚板と角柱で構成される中世土留め遺構が存在していることもわかり、史跡範囲の拡大に伴う追加指定を受けている。こうした成果からこの橋が鎌倉幕府との関わりを持っていたことを推測することができ、鎌倉時代に相模川に架けられた橋遺構として評価されている。また、橋脚が出現する原因となった関東大震災によって発生した液状化現象の状況も把握することができた。現地には、液状化によって生じた噴砂・噴礫状況が見られたほか、橋脚が持ち上がる際に引きずられた地層なども観察できた。そして、何よりも出現状況である高さの違い、傾きなどの様子は、地震によって生じた液状化現象のすごさをそのまま示している。こうしたことから、橋脚は関東大震災の痕跡を残す記念物としても評価することができ、2013 年(平成 24)にあらたに国の天然記念物に指定されている。

保存と活用の歩み

1923 年 9 月 1 日の地震と翌年 1 月 15 日の余震により埋もれていた橋脚が地上に出現したことによって、遺跡の存在が認識されるという稀有な事例であり、調査研究および保存活用もこの時点から出発することになる。本遺跡における保存と活用に関しては大きく三期に分けることができる。すなわち、出現から史跡指定と最初の整備が行われた初期保存整備(第Ⅰ期)、1965 年(昭和 40)に武藤工業を中心に行われた第Ⅱ期保存整備(第Ⅱ期)、そして、今回行われた第Ⅲ期保存整備(第Ⅲ期)である。

第Ⅰ期

(1) 沼田博士の考証と保存への取り組み

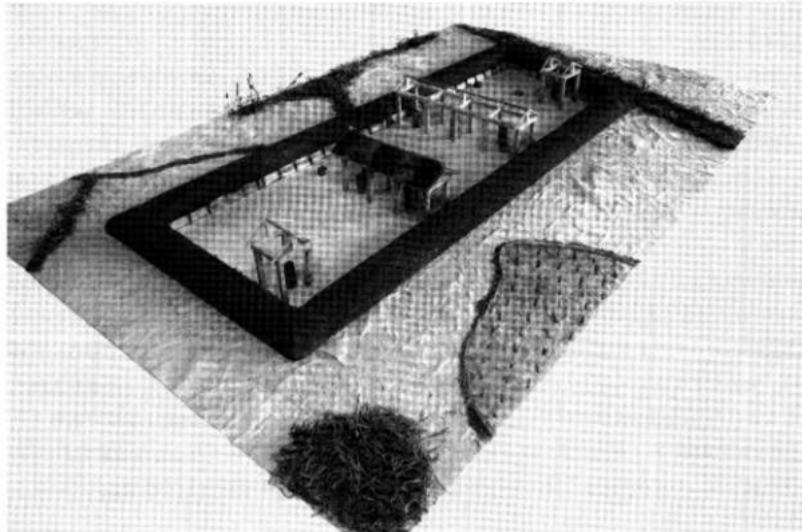
この事象を歴史的遺産として捉え考証したのは沼田頼輔博士であった。沼田博士は二度目の地震の 5 日後にあたる 1924 年 1 月 20 日に現地調査を行い、同じ年の 3 月には最初の論文を発表している(沼田 1924)。発表された論文の中では、出現した杭については橋柱とし、規模などから相模川に架かっていたものとした。また、時代については『吾妻鏡』『保曆間記』などを中心とする文献史料から鎌倉時代の 1198 年に稻毛三郎重成が架けたものと考証している。そして論文には「一日も早く當局のこれを實検せられて適當の処置を執り、保存の道を講ぜらんことを切望せざるを得ないのである。」と記し、保存実現に対する意見を述べている。指定後の 1928 年(昭和 3)10 月に発表された 3 本目の論文の最後では、これまでの考証をまとめ本遺跡の重要性を述べた後に、自分の進言が入れられて史跡指定を受けられることとなり、地方のためには新に名跡を加えることになり、学術のためには資料を伝えることができることになった、と記している。これらから、沼田博士が単に歴史的遺産の考証だけでなく、橋脚の保存を強調するとともに積極的な行動をしていることに注目しなくてはならない。地方のための名跡、学問のための資料継承という考えは、現在の遺跡の保存と活用に通じる考え方である、学ぶべき点がある。

(2) 柴田常恵の調査

内務省地理文化財調査委員に在籍していた柴田常恵は、本遺跡には1924年3月11日に来跡し調査を行っている。残念ながらこの時の柴田の調査報告は確認できず、どのような判断・評価をされたのかは不明であるが、その後の動きから推測すると沼田の考証に対して大きな異論はなかったものと思われる。いずれにせよ、行政の立場である柴田の調査により保存への動きが加速したことは間違いないと思われる。

(3) 神奈川県の仮指定と内務省の史跡指定

神奈川県の動きをみてみると、前述した1924年3月11日の柴田の現地調査に同行しているようである。そして、同年4月12日付で内務省地理課宛に「史蹟実地調査報告」を送っている。その後、内務省との協議を経て仮指定に関する手続きを進め、同年4月25日に「神奈川県告知第154号」で仮指定を行っている。そして、当時の高座郡長と藤沢警察署長宛に「史蹟保存ニ関スル件」として通知し、郡長には土地所有者に仮指定したことを見知ること、また、警察署長には取り扱いについて注意することをそれぞれ通知している。この仮指定は1919年(大正8)に制定された「史跡名勝天然記念物保存法」によっているが、これは同法第一条の中に、必要があるときは内務大臣が指定する前に地方長官が仮にこれを指定することができることとなっており、これに基づき神奈川県知事が仮指定を行ったわけである。つまり仮指定を先行したということは、橋脚においては、国の指定を受ける前に仮指定する必要があると判断されたわけだが、その理由については、水田耕作の時期が近づいており、保存が必要であることを土地所有者に知らせ現状



保管図面を基に作成した初期保存池と上屋の復元模型

の維持を保つためとされている。その結果、出現後約3ヵ月で仮指定が行われることとなった。こうした早い動きは目を見張るものがあり、取り組みについて見習うべきものがあると思われる。仮指定を受けた本遺跡は、2年6ヵ月後に国の史跡に指定される。当時の国の所管は内務省で、1926年10月20日付け内務省告示第158号により史跡指定されている。

(4) 初期保存整備について

仮指定に際しての国と県との協議の中で、指定後に橋脚の保存方法について検討するようになっていた。これに基づき初期段階での保存整備計画が検討されていたわけであるが、神奈川県に保管されていた資料によりその内容の一端が明らかになった。それによると計画は出現した橋脚の周辺に周堤を築き保存池を設けるもので、木製品である橋脚の保存を水漬けで行うことを基本としている。また、各橋脚には上屋を設ける計画も見られ、直射日光などを避け乾燥を防ぐことを目的としたものと思われる。さらに、史跡の標柱を設置することも検討していたことが明らかになった。こうしたことは計画図面の存在から内容を知ることができたほか、周堤に関しては発掘調査で確認された内容と平面的にほぼ一致することも判明した。しかしながら、何らかの事情で上屋と標柱は作られていない。現地では、その後橋脚の保存に関して地元下町屋地区の青年団が橋脚にコールタールを塗って腐食を防いでいたという話が伝えられている。

(5) 公開活用の動き

出現から、調査、仮指定を経て本指定を受けた本史跡であるが、指定とその後における公開活用はどのようなものであったのであろうか。確認できる資料を挙げていくと、まず『東京日日新聞』への掲載が最も早い。そして平行するように沼田博士の論文とパンフレットであろう。これらは保存を進めるためのものとして公開に努めたものであろう。これに対して、保存が決まった後の動きとしては、仮指定の翌月にあたる1924年5月に、当時の茅ヶ崎町長であった新田信によって雑誌『斯民』に紹介されている。行政の長が取り上げていることは注目される。1927年には『神奈川縣震災誌』が刊行され、地震関係の報告記述が中心の中に橋脚の状況が掲載されている。同じ年には日本山水会が作成した『相模川名所番付　両岸対勝六十六景』に東岸の前頭で「相模橋の古杭」として掲載されている。これは、おそらく相模川の両岸における名所を力士に見立て東西33ヶ所ずつに分けて、番付と同様に位順に掲載したものであろうと思われる。すると本史跡は指定を受けた翌年には、前頭四枚目に位置づけられたことになり興味深い。また1932年(昭和7年)に作成された『神奈川縣鳥瞰図』には、県内の地名や名所が記されているが、この中にも本史跡が記されており、一定の評価を受け広く案内されていたことを知ることができる。これらは、史跡を名所として紹介しているもので、現在言われている観光の視点をすでに取り入れていることになり活用の柔軟さを見ることができる。さらに1928年には、鶴嶺小学校で編集された『茅ヶ崎町鶴嶺郷土史』や茅ヶ崎尋常高等小学校で発行された『生活の凝視と学校經營』に「旧相模川橋柱」として掲載されており、学校教育の場面において郷土資料として活用されていたことがわかる。

初期保存整備がなされた橋脚は、こうした公開活用の働きかけによってその存在が知られ訪れ

る人も増えていったものと推測できる。この時期は史蹟めぐりが盛んに行われており、本史跡にも多くの来跡者があったと思われる。茅ヶ崎地域では「明治の茅ヶ崎社」による史蹟めぐりが行われており、訪れた感想などを掲載した会報が刊行されている。また、本史跡の絵葉書が作成されていることなどから、積極的に公開活用に取り組んでいたことがうかがえる。

第II期

大正から昭和初期にかけて整備された本史跡は、その後、戦前、戦中、戦後と保存池で保存されてきたが、昭和30年代には茅ヶ崎市も大きく都市化が進むようになり、本史跡周辺の環境も著しく変化が生じていくことになる。昭和30年代終わりには民間企業の武藤工業が本史跡の周辺を入手し1965年(昭和40)に保存池と周辺の整備を行っている。

第II期保存整備の内容は、初期保存池の護岸である周堤を含む周辺全体が大量の土で埋められ周辺地盤が高くなっている。このことは、確認調査で観察できた土層状況からも見ることができた。そして、保存池には新たな万年堀が設けられ水深を増している。しかし、平面形は当初の方形を継承することなく梢円形に変化し全体として保存池が小さくなってしまった。このため、北西部に出現した橋脚一本が池の外側になってしまっている。背景には、初期保存整備から時間が経ち北西部の橋脚自体の存在がわからなくなってしまったからだと思われる。武藤工業はその後の維持管理においても保存池への水供給や定期的な水草除去などを継続しており、本遺跡の保存にとって果たした役割は大きく評価される。また、第II期保存整備が終了した5年後には、沼田博士が詠んだ漢詩が篤志家斎藤由蔵によって「湘江古橋行」詩碑となって建立される。こうしたことを見していくと、この時期においては、保存してきた史跡がさらに継承していくため地元からの多大な協力を得た時期と認識することができる。しかしながら見方を変えるならば、文化財保護部局が主体的に守るという形が出来ない体制の弱さを露呈していた時期とも言えるであろう。

第III期

橋脚に傷みが見られたことから実施された第III期保存整備では、確認調査の成果を踏まえ保存の基本的な方針を以下のとおりに定めた。1) 国指定史跡であることを重視し、橋脚および橋脚を支持す

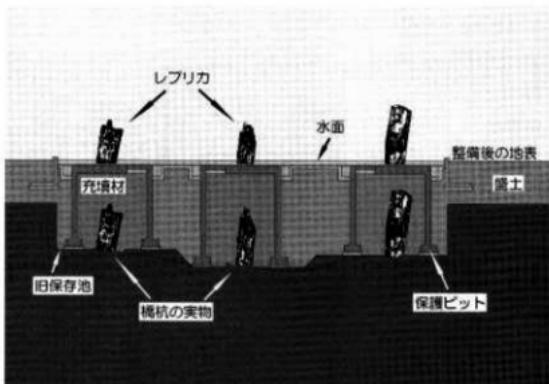


第II期の保存池の様子

る地盤とも現地から動かさず、かつ破損しない整備を行う。2) 橋脚の保存処理は、腐朽の進行を止め現状を保存する方法とし科学的処理は行わない。したがって、今回的方法は恒久的な保存とならないことから、当面の保存法とし定期的な観察を行う。3) 本史跡は、保存池とともに憩いの場として市民に親しまれており、その景観を大きく変化させないように配慮する。

こうした方針に基づき保存整備が進められたが、具体的な方法としては、橋脚については橋脚自体への保存処理を行わず、橋脚を保護ピットで覆いその中に湿潤を保つ充填材を入れることで橋脚を密閉し、腐朽の進行をとめ現状を維持することとした。このため、実物の橋脚を公開することができなくなることから、保護ピットの上部には精巧なレプリカを置くこととした。このレプリカの設置は、地震による液状化現象で橋脚が出現したことを念頭に、関東大震災時に出現した状態を復元することとし、高さ以外（実物より約 2.6m 上に設置）は実物の橋脚と同じ平面位置、傾きになるように設置した。さらに、整備前の池の中にある橋脚という景観を維持するために池を設けることにし、形については確認調査等で明らかになった初期保存池を再現することとした。そして新たに整備した保存池の周辺にはガイダンス施設を設置しながら、整備前の散策路の位置や桜などを極力変更させないように配慮している。また、整備に伴い実施した現地調査の見学会や指定 80 周年記念シンポジウムの開催、パンフレット作成などを実施したが、整備後においても史跡見学への対応や丸ごと博物館事業における資源として、まち歩きなどに利用しながら広く周知を続けている。また、あらたに天然記念物に指定されたことを記念したシンポジウムを出現 90 年後の 2013 年 9 月 1 日に同じ場所、同じ時間という設定で開催するなど活用に取り組んでいる。なお、橋脚を保護ピットで密封するという保存方法は、木製品の保存方法としては初めて実施したものであり経過観察を行っている。

以上、本史跡に関わる調査と保存と活用の歩みを見てきたが、いくつかの点が注目される。本遺跡は地震による出現という稀有な状況で私達にその存在を示したが、出現（2 回目の余震後）よりわずか 3 ヶ月で仮指定、そして約 2 年半後には国指定という速さで保存が決定されたが、この迅速な動きは評価できる。このことは、地元、研究者、行政がそれぞれの役目を果たしたことが背景にあるのではないだろうか。地元では、この事象に対応し沼田博士を招聘するとともに文化遺産としての理解を示し、



保存整備の概念図

これらの保存に協力をするのである。したがって、行政当局を保存へと動かした一つの要因に、地元の存在があったということを忘れてはならない。また、研究者の動きを見ると、連絡を受けた沼田博士は余震から5日後には現地を訪れ踏査を行い記録を作成しこれらに対する考証を論文にまとめ発表している。また、沼田博士は新聞にも歴史遺産としての重要性を発表し、広く知らしめるとともに保存について関係機関に働きかけをしている。さらに、沼田の熱意を受けるように、行政の国や神奈川県の動きも早かった。出現後約2ヶ月半には内務省地理課の意向を受け柴田常恵が現地調査を行っている。このときには神奈川県の担当者も同行していると思われ、写真をはじめとする記録を作成し調査報告を行っている。その後の取り扱いについても国と県とで協議を重ねた結果、仮指定という手法で現地の保存を確保している。こうした地元、研究者、行政それぞれが保存に向かって行動したことは重要である。また、保存整備については木製品を保存する方法として水漬を選択しているが、全てを水没させるのではなく上部の一部を露出させ橋脚を見せることを意識している。加えて上屋を作ることを合わせて考えるなど、保存と活用についてのバランスを見ることができる。さらに、橋脚についての公開活用についても、名所として観光団や絵はがきなどに積極的に掲載し、その存在を知らしめる努力を行うなど、遺跡の保存と活用に関して当時の人たちの取り組みから学ぶべきことは少なくない。

一方、遺跡の保存に関する課題も見ることができる。地元、研究者、行政がそれぞれの役割を



整備後の橋脚

果たし、いち早い文化財指定と保存整備を行うなど、この稀有な史跡が後世に継承されていく基盤が作り上げられたにもかかわらず、時間の経過とともに、当初の取り組み姿勢は継承されず、加えて、戦争という時代の中で、看板も立て直されることなく過ぎていくことになる。幸い、民間企業進出に伴う整備によって史跡自体は継承される。しかしこの整備によって初期保存池の平面形は変化する。そして、単に平面形を変えたというだけではなく、本来保存すべき橋脚を埋めてしまったという文化財保護上重大な誤りを引き起こしてしまっている。この背景には、史跡の本質的なものの継承と維持管理への認識が不足していたからではないだろうか。このことは、今回の整備を行うきっかけとなった橋脚腐朽が進行するという状況も引き起こしている。つまり、第Ⅱ期保存整備の後も適正な管理が行われていなかった可能性がある。守るべき史跡の本質価値の理解と維持管理の重要性への認識が継続されなければ、遺跡の保存と活用は頓挫してしまう、という根幹にかかる課題を示していると思う。

記録保存された遺跡の保存と活用について

史跡指定を受け現状保存してきた遺跡である橋脚について見てきたが、保存されている遺跡は「現状保存」されたものだけではない。現在、埋蔵文化財行政では開発等に伴い事前に届出がされた遺跡に対し「現状保存」か「記録保存」という保存処置の判断が下されている。したがって、遺跡の保存と活用を考える際には「記録保存」される遺跡についても対象とする必要があるのではないか。しかも、その割合は圧倒的に「記録保存」されるものが多いのが現実である。本来であれば「記録保存」される遺跡の資料活用について種々の議論が行われなければならないが、実際は「現状保存」され史跡等になっている遺跡の保存活用が注目される。無論、指定を受ける内容の遺跡であることからその評価は高くインパクトは強いと思われる。しかしながら、そうした遺跡評価の高低に関わらず、遺跡の存在を知らしめることが重要であろう。つまり、身近にある遺跡の存在を知ってもらうことが、多くの人が遺跡への理解を深める方法になるものと考える。現在、「記録保存」される遺跡については、現地見学会、遺跡発表会、報告書刊行など様々な形での取組が行われており一定の効果を上げてきている。しかしながら、こうした遺跡についての公開活用は十分であろうか。例えば学校教育との連携についてはまだまだ少なく地域の歴史を知る上で有効に活用できる教材として積極的に取り組んでいく必要があろう。その際、教員と文化財担当者とのコラボ授業という形も含め大胆な取り組みが必要があろう。また、そうした授業研究を共同で取り組める機会を設けることも最初の一歩になると思われる。さらに、取り組まなければならないのは地域での公開活用であろう。遺跡調査が行われている現地での見学会は行われているが、調査後の整理や報告書刊行後の成果についても地域に還元すべきだと思う。例えば、地域ごとに行われている自治会の文化祭などに出展し、自分たちが住む地域に遺跡があるということを知らしめることからはじめることが大切だと思われる。県や市町村単位での発表会は比較的定着しているが、どうしても関心がある人の来場が中心となりがちである。もちろんこうした機会を作るのは当然であるが、発信するから見たければ来なさい、というスタンスで

は、関心のない方などを取り込むことができず幅の広がりは望めない。地域における文化祭では、書道、手芸、絵画、写真、盆栽、短歌などの展示と一緒に土器や石器が並べられることから、地域の方へのアプローチの機会としては有効だと思う。そもそも、研究者や一部興味のある人のみではなく、広く市民にその存在を知ってもらうように工夫していかなければならないと思う。

加えて懸念されるのは、遺跡が存在した土地に対する周知が少ないように感じられる。当然のことながら「記録保存」される遺跡は何らかの土木工事等で現地から遺構が消滅してしまう。しかしながら、その場所自体は残っているはずである。土を削り地形を変貌させたとしても、その絶対的な位置、地点は存在する。もちろんダム工事などで湖になってしまうなど、その地点に行くことができない例外的なケースもあるが、ここで必要なのは土地の歴史をきちんと後世に継承するということで、その方法で最も効果的なのは、現地にその記憶を残すことである。具体的には、記念碑や説明版など遺跡の存在を示すものを設置することである。しかしながら、なかなか実現できていないのが現実で、その土地の記憶を継続させることが難しい。発掘調査には多大な費用をかけているが、こうした公開活用にはなかなか予算が伴わないのが現状であろう。むろん現在の原因者負担の考え方に基づきその費用は原因者から提供してもらえばという考えがあるかもしれないが、こうした活用につながる部分については、文化財部局での費用でやることに意



記録保存された遺跡に設置したモニュメント

味があると思われる。文化財保護には一定程度お金がかかるという現実を示す必要もある。いつまでの他力での費用捻出は限界があるのではないか。もうひとつ大切なのは、仮に記念碑などが設置でき、土地の記憶をその場所に残せたとしても、その意味や経過が伝わらなければ、やがて存在そのものがなくなってしまうと思う。道祖神や庚申塔などが次第に移されたり盗難を受けたりする現実は、文化財の意味が伝わっていないからかもしれない。文化財の全部を行政が守るということには限界があり、その地域での継承と見守りが必要だと思われる。そして文化財を通じて地域の連携が高まる一つのきっかけになれば喜ばしいことである。

おわりに

遺跡の保存と活用について、一つは「現状保存」されている事例について、もう一つは「記録保存」される事例について見てきた。今回の講座で「時空の交差点」と表現された遺跡との出会いを伝えていくには、調査の成果などを市民や地域に還元することを目標にすることが大切であると思われる。文化財保護の基本は、地域における特徴や歴史を尊重し、地域ごとに引き継いでいかなければならない。遺跡の保存と活用も、地域に密着した市民をはじめ研究者や行政を巻き込みながら進めていくことが重要であると考える。

引用・参考文献

- 沼田頼輔 1924 「震災に由つて出現したる相模河橋脚に就いて」『歴史地理』43 - 3 日本歴史地理学会
沼田頼輔 1928 「神奈川県茅ヶ崎町出現の古橋柱」『史蹟名勝天然記念物』3 - 10 史蹟名勝記念物保存協会
沼田頼輔 1930 「旧相模川橋を中心としての郷土史」『寒川の泉』10 寒川村青年団文芸部
新田 信 1924 「大地震で現れたる古相模川橋脚」『斯民』19-5 報徳会
茅ヶ崎市史編集員会 2000 「相模川橋柱」『茅ヶ崎市史史料集3 茅ヶ崎市地誌集成』茅ヶ崎市
薗品彦一 2000 「旧相模川の橋脚」『茅ヶ崎市史ブックレット2 ちがさき歴史の散歩道』茅ヶ崎市
神奈川県 1927 「第25章、海底の隆起と沿海の概況（旧相模橋杭）」『神奈川県震災誌』神奈川県
大村浩司 2008 『史跡 旧相模川橋脚』茅ヶ崎市教育委員会
茅ヶ崎市郷土研究会 1970 『相模川橋脚詩碑と斎藤由藏氏』
吉田初三郎 1932 『神奈川県鳥瞰図』
日本山水会 1927 『相模川名所番附両岸対勝六十六景』

神奈川県指定史跡等一覧表（岡本孝之編）

名 称	所 在	種 別	時 代	指 定 年	備 考
湘南原町					
伝・土御松山家墓	鎌古屋955	里 史跡 中世	1965年		
大庭山古墳竪穴報音像群	鎌治原653	町 史跡 江戸	1979年		
羽林の橋	曾下335-2	町 史跡 江戸	1979年	五社神社本殿は県指定文化財	
1号-3号の墓所	城塙252	里 史跡 中世	1965年	故郷立境内	
大野城址(十把武山)	城山101	町 史跡 江戸	2001年		
古市柏坂の遺跡	吉良宇柏坂4	町 史跡 江戸	2004年		
鶴鳴石古墳遺跡	鶴鳴石444	町 史跡 江戸	1979年	鶴鳴寺・山口一帯	
鶴鳴石	宮上666	町 史跡 江戸	1979年	鶴鳴会館	
小山地蔵堂・當印塔	古市1	町 史跡 江戸	1979年		
成瀬家宝印院印跡	福井117	町 史跡 江戸	1979年		
成瀬家(小道地蔵堂)の明和2年の碑	吉良宇柏坂1	町 史跡 江戸	2004年	成瀬院内	
小田原市					
小田原城跡		国 中世・近世	1938年	城址公園・日本の歴史公園100選	
石丸山(一夜城跡)		国 中世	1959年	歴史公園・日本の歴史公園100選	
石丸山の古跡場	石郷4701ほか	県 中世	1954年		
北条氏・氏開の墓所	空堀2-7-8	市 中世	1957年		
大久保氏の墓所	桂山1-24-7	市 近世	1951年	大久寺	
鈴木氏の墓所と鞍牛和島の豪廬	人生山462	市 江戸	1961年	招人寺	
出羽守・羽羽根尾根穴古墳	お根尾、岡島	市 占墳	1978年	羽根尾史跡公園	
鶴太内藤の墓所(1基)	新横町1-17-1	市 江戸	1964年	長久寺	
成瀬家墓	白井3-11-3	市 江戸	1957年		
八幡手古墳	穴堀44	市 古墳	1951年		
八幡手古墳/原4号古墳	久野2575	市 古墳	1951年		
中井山古墳	久野2561	市 中世	1957年	当初敷石作居	
明治元年本町町役所	本町3-12-3	市 近代	1957年		
明治元年本町町役所	本町3-5-5	市 近代	1957年		
小田原市羽根尾丘日塚の國文時代初期出土品		県 原始	2004年		
子午山古跡跡第IV地点第1号土坑出土物		市 占墳	2006年		
子午山古跡跡第IV地点第1号土坑出土物		市 古墳	2006年		
子代山古跡出土十五		市 古代	2006年		
子午山古跡跡第IV地点出土木簡		市 古代	2913年		
南足柄市					
船出跡	岩沼1039	市 中世	1966年		
又命塚	然田1912ほか	市 江戸	1966年		
佐倉御前御の墓	然田127	市 中世	1966年		
矢ヶ崎御殿跡	矢ヶ崎1508	市 江戸	1973年		
矢ヶ崎御殿の墓	沼1313	市 江戸	1973年		
佐倉御前御の墓	然田189	市 中世	1973年		
佐倉御殿跡の墓	雨田507	市 江戸	1973年	弘行寺	
矢ヶ崎御殿跡	大曾根1535	市 江戸	1973年		
伝・佐倉東一族の宝塚印跡3基	然田1528	市 中世	1975年	成明寺	
人冢	穂波3697-2	市 占墳	1985年	火天院	
松平大和守直基の墓	大野町1157	市 江戸	2007年	成美寺	
確田山古墳出土品一括	間木337	市 古墳	1964年	成高寺	
湖野山古墳出土品一括	広野1544	市 古墳	1991年	路上資料館	
多摩川	大庭町1157	市 江戸	1988年	成美寺	
山王町					
河村城跡	山北・岸	県 中世	1996年	河村城跡歴史公園・美しい歩きたくなる日本のみち100選	
御前御の跡	共和(人連)	県 中世	1969年		
松	岸	町 江戸	1997年		
尾山古墳出土品	神尾田	県 原始		丹沢湖記念館に展示	
中山川跡	中川	県 原始		一部保存	
松田町					
かみさわ古窯群		古代	未?	1982年景明寺史料公園に移築	
松田古跡	松田度子	町 中世	1971年		
景明寺史跡公園		中世			
大庭町					
土偶	中庭敷	国 有形	1961年	個人	
宝塚印跡	上大井	町 有形 中世	1972年	個人	
鐵石臼痕跡	上山田	町 正文 碑文	1971年	個人	
酒匂川取水口跡		町 正文	1971年	中央公民館に移築	
ストーンサークル(遺跡列石)	金子台	町 正文 碑文	1973年	第一生命	
中井町					
米谷一族墓石供養塔・墓	井ノ口	町 有形 江戸	1985年	米倉寺	
一室町					
赤生土器	秋葉山	町 有形 陶生	1974年	生産学習センター	
出井		町 有形 赤色以前	1973年	川勾神社	
左井氏の墓		町 火葬 江戸		北公園	
大庭町					
たにこ谷口壇穴墓群	佐佐木下れこ谷戸56	県 史跡 古墳			
七久保塚六角形	四府本町庄ヶ久保1841	県 史跡 古墳			
桃谷寺古戸横穴墓群	人藏寺古戸谷戸626-1	県 史跡 古墳			
名口古塚	大槻字の谷原	県 史跡 古墳			
大庭町(天王山古跡)					
小田原本町の甲塚					
中井町					

五郎ヶ台貝塚	広川735-3	国	史跡	碑文	1972年
【国財】墨書き土器他 稲荷前A遺跡第1地点 1 貝堅穴住居址出土 貝塚・活		市	考古	古代	2004年 市博物館
東京内陸部他 真土大塚山古墳出土寶物一括 宝物古墳		市	考古	古墳	2010年 市博物館 東越古墳公司
葛飾市					
吹生式土器	平戸	市	考古	先生	1965年 南小学校
米舟丹後守一族の墓地	堀山下1075	市	考古	江戸	1968年 薩摩寺
勘定別公御首塚	堀山原	市	中津		1971年 国のふるさと公園
後土下古墳群	堀山下380 3	市	吉備		1972年 吉備古坟公園
子塚古墳	下大岡子...タ子330	市	吉備		1985年
葛飾市平沢向町遺跡出土の吹生前磨型土器		県	先生		2003年 桜子手古墳展示館
伊勢原市					
【伊勢原八幡台古墳時代住居跡】	東大竹・八幡台1丁目	国	原始		1931年
上杉敷跡	上箱原字立原	市	中津		1969年
今慈願寺裏ノ塚	日向町一ノ段	市	江戸		1969年
一ノ坪条里制度遺跡	笠置子一ノ段ほか	市	古代		1969年
荒廃跡	笠置子二ノ段	市	古代		1969年
下谷戸遺跡跡地・刻石列石および生垣跡		市	原始		1969年 三ノ宮比々多神社に移転
太田道灌の墓	上新屋	市	中津		1969年 頭昌院
太田道灌の墓	下横尾	市	中津		1969年 人吉寺
岡崎城跡	岡崎	市	中津		1969年 無量寺
又吉原古墳場	西富岡字北東高原	市	中津		1969年
今美寺跡	三ノ宮竹之内	市	中津		1969年
宝成坊境内	日向	市	中津		1973年 宝成坊
休居古墳出土品		市	古墳		1982年 三ノ宮比々多神社
金糞根御室御器		市	古墳		1982年 三ノ宮比々多神社
佐原山古墳出土品		市	古墳		1988年 三ノ宮比々多神社
野崎古墳出土品		市	古墳		1988年 三ノ宮比々多神社
石造多形壇	下横尾	市	江戸		1982年 泽渡寺
伊藤中世石塔群(伝荷葉式頭の墓)	沖縄市西町	市	中津		2005年
日向園ノ山古墳玉觸跡	日向	市	中津		2005年
下北原遺跡			碑文		配水池に一部保存
丸山城跡					城址公園
厚木市					
在妻坂古墳	下依知		古墳		
地頭山古墳	船子		古墳		地頭山洞門上に保存
山ノ上2号墳	及川		古墳		及川町地内に現状保存
山ノ上1分塚	及川		古墳		公園に
天神山古墳	戸塚3丁目		古墳		東急公園
登山古墳群	飯山		古墳		古墳史跡公園
七沢城址	七沢		中津		七沢ハピリ病院
川尻木村慶松出雲跡	東町8	市	近代		1961年
萩野山中高勝屋跡	下萩山251ほか	市	江戸		1970年 中野公園
鳥山尾原木伐採跡	厚木町6	市	江戸		1977年
木岡氏忠代の墓	金沢262	市	中津		1979年 建徳寺
古石物28點	金沢263	市	中津		1979年 建徳寺
土師器	下古武	市	古墳		1961年 個人
厚木市豊山古墳出土玉觸	飯山	市	古墳		1992年 市郷土資料館
了の神童跡出土玉触石器		市	先生		2009年 市郷土資料館
休子土器遺跡出土孔付土器		市	原始		2009年 市郷土資料館
愛川町					
八音山佐藤道山跡	八音山	町			1972年 八音神社
三合合戰跡	三井	町	中津		1972年
旧光防所の跡日	八音山	町			1976年 八音神社
休生町の有角石器	中津	町	先生		1979年
半鐘の石碑		町	原始		1980年
伝八音山出土土製鉢群		町			2001年 町郷土資料館
八音山絆縫遺跡出土木適合子形壹持仏		町			2009年 町郷土資料館
清川村					
松口		[社]			1969年
相模原市					
寸貫裏石器時代遺跡	緑区寸貫裏568-2	区	原始		1930年
川底石器時代遺跡	緑区谷ヶ谷2丁目798-2ほか	区	原始		1931年
勝坂遺跡	前区勝坂1780ほか	区	原始		1974年
田名向原遺跡	中央区田名向原3-13	区	旧石器		1999年
勝口	中津200	市	中津		1969年 富門寺
三ヶ木遺跡出土馬	緑区二ヶ木272-1	市	中津		1961年 清久高等学校
田名向原森跡住居遺構出土の旧石器時代石器群		市	旧石器		2010年 公園・学習館
中和田佐々4年の板碑(双持)	南区上鶴間本町8 499	市	中津		2001年 駿吉筋尚
上大部乾々2年の画像板碑	中央区上大部3-12	市	中津		2001年
無量光寺庵内及び外周の遺跡	南区当麻703-2ほか	市	中津		2001年 無量光寺
駒吉町古墳群内	南区上鶴間本町8 499	市	中津・共世		2001年
当麻谷原古墳(1号墳)	南区当麻140	市	古墳		2001年 相模原ボンボン
当麻東古墳	南区当麻140-2ほか	市	古墳		2001年 当麻東京公園
相模野基原北端古墳	南区相模大野2099 2	市	近代		2001年
龍崎寺の廻野兵庫島	中央区相模野103-1440-1	市	江戸		2002年
上巣山53年の塚跡	中央区上巣592	市	中津		2004年 安養寺
田名坂上遺跡出土十三彩小器	中央区	市	古代		2004年 市立博物館
田名坂上遺跡群山黒曜石原石		市	旧石器		学習館
勝坂遺跡出土縄文時代草創期遺物		市	碑文		市立博物館

当麻東心古墳及び東施遺跡出土品	市	古墳	市立博物館
矢張・久保遺跡出土品	市	古代	市立博物館
勝坂有尾谷祭遺跡出土の祭祀遺物	市	古代	2013年 市立博物館
佐原(大山祇遺跡)	市登	江戸	2001年
80手取伝説水瓶	中央区上池1-338-10ほか	市登	2001年
でらぼっち広良伝説水瓶	中央区御池台2-2003	市登	2001年 市立公園
元塙本清透	墨田区元塙本町8-22-1	市登	旧石器・縄文 2002年
上野の十界	墨田区鏡ヶ崎90-1ほか	市登	平安 2002年
新田町御神社の呼ばれ山	中央区舟町1-1867-2	市登	江戸 2002年 新田町御神社
西久井地蔵			私立西久井地蔵山公園
葛飾市			
越後塚火葬墓群	入谷	市 史跡 古墳	1967年
秋の木塚塙六塙群	入谷	市 史跡 古墳	1974年
荒川遺跡(住跡跡及び墓跡包囲地)	市	史跡 縄文	1982年 立農明伸社
大和市			
上野遺跡出土品		県 史跡 古墳	1987年 文化財保護施設
上野田坂山遺跡出土品		県 史跡 古墳	1987年 文化財保護施設
財石川遺跡	上和田2710	市 史跡	1988年 聖徳寺
旧中根山遺跡	福田2176	市 史跡	1988年 常楽寺
旧小倉宝室寺地	下郷町2359-5	市 史跡	2003年 下郷町ふるさと館
高名市			
出雲山分寺跡	国分	国 史跡 古代	1922年 市立郷土資料館
和田山分寺跡	国分	国 史跡 古代	1997年
筑紫山古墳群	上今見4丁目ほか	国 史跡 古墳	2005年
上田中村遺跡遺構群	坂田町	県 史跡 中世	1981年 公園
鶴京坂古墳		市 史跡 古墳	1998年 ひときや公園
越前市			
柿之木塙	吉岡	市 史跡 古代	2011年
柿之木塙出土品		県 史跡 古代	2002年 市庁舎に展示
早川城跡(城山公園)	早川	県 史跡 中世	2009年 城山公園
高山氏第3代の墓碑群	上土棚	市 史跡 江戸	源氏寺
大庭庄・塩の墓石群	深谷	市 史跡 江戸	長慶寺
寺尾遺跡出土品			
米子町			
赤の坂		町 史跡	1980年
宝来山跡		町 史跡	1985年 鶴金寺
大(火)の神塚		町 史跡	1997年
岡田遺跡出土の約千手器		町 史跡	2012年
茅ヶ崎市			
田畠城跡		市 史跡 中世	1926年 公園
柴貝塚	堺	県 史跡 縄文	1992年
淨見寺の大圓宮・萬の墓所	堀4330	市 史跡 江戸	1961年 净見寺
えのり一里塚	元町5890	市 史跡 江戸	1961年
小物穴(近世前室)屋敷跡	柳島1丁目282	市 史跡 江戸	2013年
越後神社の鳥居及び參道松並木	糸之町732ほか	市 史跡 江戸	1969年
お主塚出土の漆塗形土器		市 史跡	文化資料館
川崎城跡	兵之町356	市 中世	龍前城
茅ヶ崎市			
日根森味方供養塔	西高1-8-1	国 史跡 中世	1926年 清淨光寺
日ノ鳥	江の島	国 史跡	1960年
杉山和一の墓	江の島2-2-14	市 史跡	1963年 西南薬園
大島宿駄の墓	羽宿神明3-3-21	市 史跡	1965年 空乗寺
財金寺の跡	羽島2-10-30	市 史跡 近代	1969年
西宮貝塚	西高425	市 史跡 縄文	1976年 清淨光寺
神主寺御子塚群(横穴式)群	川名566-1ほか	市 史跡 古墳	1977年 神主寺
津上鍬子塚群5基	芦原6590	市 史跡	1992年 津上院
矢先寺御子塚群5基	下十郎1042	市 史跡	1992年 矢先寺
前田古跡跡出土人面彫畫土器		市 史跡	1996年
大庭北村			大庭城址公園
鎌倉市			
法門寺跡(敷帳跡・北条家時高)	西御門	国 史跡 中世	2006年
白野成基墓	坂の段	県 史跡 中世	1927年
今小明寺境内・所蔵品相場	同谷谷	市 史跡 中世	2007年
高尾寺境内・梵天像	様子寺	市 史跡 中世	2008年
仁王杉彫刻	妙善寺	市 史跡 中世	1927年
船付竹塹(新田氏貢貢伝説地)	船付竹塹	市 史跡 中世	1934年
大正八幡宮	小川町ほか	市 史跡 中世	1934年
小曾寺境内	山ノ内	国 史跡 中世	1966年
布施寺境内	局谷谷	市 史跡 中世	1966年
水端寺跡	二瀬堂	国 史跡 中世	1966年
建仁寺境内	山ノ内	市 史跡 中世	1966年
淨妙寺境内	淨明寺	市 史跡 中世	1966年
鶴間八幡宮廻内	雪ノ下ほか	市 史跡 中世	1967年
川口寺境内	山ノ内ほか	市 史跡 中世	1967年
守向寺境内	守向堂	市 史跡 中世	1967年
和賀江島	材木廠	国 史跡	1968年
朝氣奈切通	一ノ所	市 史跡 中世	1969年
鳥谷坂	山ガ谷ほか	国 史跡 中世	1969年
山無呂坂	雪ノ下	市 史跡 中世	1969年
化粧坂	崩谷ほか	市 史跡 中世	1969年
達吳裏塙内	徳谷	市 史跡 中世	1971年
大仏切通	長谷ほか	市 史跡 中世	1977年

北条氏常野空跡	常野	国 史跡 中世	1978年
名越切通	大町	国 史跡 中世	1966年
明月院境内	山ノ内	国 史跡 中世	1984年
東勝寺跡	小町	国 史跡 中世	1998年
鎌倉大仏殿跡	長谷川ほか	国 史跡 中世	2004年
深成天神社境内	一郎塚	国 史跡 中世	2005年
仏法寺跡	施薦寺ほか	国 史跡 中世	2006年
一升竹遺跡	施薦寺	国 史跡 中世	2007年
大町御厨町口遺跡	大町	国 史跡 中世	2010年
段墓	小町	国 史跡 中世	1955年
百八やぐら(聖心寺)	二階堂	國 史跡 中世	1961年 聖心寺
十一人家	福村ガ原1丁目453	市 史跡 中世	1961年
内作室墓地	村木原6丁目858	市 史跡 江戸	1962年
瓜ヶ谷やぐら群	山ノ内手平瓜ヶ谷1195	市 史跡 中世	1971年
多宝寺やぐら群	扇ガ谷2丁目268 1	市 史跡 中世	1971年
洗馬谷横穴群	闇闇字下坪373	市 史跡 古墳	1971年
千葉市公塚穴群	御成町122	市 史跡 古墳	1974年
唐足寺庭園		国 名勝	1932年
丹波守庭園		国 名勝	1932年
瑞泉寺庭園		国 名勝	1981年
船岡山伏見櫻竹寺		国 考古 中世	1913年 研究所
桂香堂圓通寺山門前廣場		国 考古 中世	1968年 寶光寺
財寶山		国 考古 中世	1968年 桃源寺
鎌倉御所立石御厨跡御厨		国 考古 中世	1977年 鎌倉寺
水龍寺内御厨出土土器		国 考古 中世	2003年 鎌倉山宝船
今小町御厨跡谷川出土の輸入陶器		国 考古 山地	2003年 鎌倉山宝船
多宝寺やぐら群出土品		市 考古 中世	1971年 ふじみ野市
大平寺出土品		市 考古 中世	1974年 別所寺
石碑		市 考古 中世	1975年 葦原寺
坂經模型版		市 考古 中世	2002年 鎌倉山宝船
木簡		市 考古 中世	2003年 鎌倉山宝船
木簡(天平五年鉢)		市 考古 古代	2004年 鎌倉山宝船
白磁西耳尊		市 考古 中世	2004年 鎌倉山宝船
茶目重輪軒出土の廻紋品		市 考古 中世	2006年 鎌倉山宝船
北条時房・頼時鉢出土の懸念		市 考古 中世	2006年
水桶寺鶴山出土の正徳昌		市 考古 中世	2007年
今小町御厨跡出土の廻紋木札		市 考古 中世	2012年 鎌倉山宝船
佐助ヶ谷御厨跡出土の宝塔文勅進札版木		市 考古 中世	2013年 鎌倉山宝船
御成小学校		市 考古 中世	
道志市			
名越切通	小坪7丁目ほか	国 史跡 中世	1966年
和賀江筋	小坪5丁目	国 史跡 中世	1968年
久江桜山古墳群	桜山7丁目ほか	国 史跡 古墳	2002年
泡子遺跡群出土品		国 考古	2002年 泡子遺跡群資料館
三ノ山やぐら群	前間2丁目1402	市 史跡 中世	1970年 神武寺
みくらやぐら群	前間2丁目1402	市 史跡 中世	1970年 神武寺
光祖やぐら群穴	前間2丁目23-24	市 小字 古墳・中世	1971年
六代天皇の基佐御地	桜山8丁目2013	市 史跡	1978年
山の根谷横穴群六	山の根2丁目 1-6	市 史跡 古墳	1972年
葉山町			
葉江桜山古墳群	葉江字芋久保ほか	国 史跡 古墳	2002年
大正天皇忌御節・明和天皇皇后御承の連	一色2123 1	市 近代	1986年
古跡の墓石(即ち副葬品)	一色1355	市	1987年 宝教寺
旗立山	堀内41-1	市	1992年
横須賀市			
三浦塙針葉		南 江戸	1923年
夏島日家		国 講文	1972年
茅山古墳		国 史跡 講文	1954年
吉井日榮寺を中心とした遺跡		国 史跡 講文	1973年
吉井日榮寺出土の繩文時代早期の骨角牙器・貝		国 考古 講文	2002年
一勝寺		市	1987年
南極松		市	1965年
衣笠丘跡		市	1966年
相引堂跡及び周辺地域		市 江戸	1968年
相引堂跡及び周辺地域	忠心寺	市 江戸	1970年
伝三浦義美廟所		市 中世	1973年
愛と日田		市 中世	1973年
伝三浦義母とその一の党的廟所		市 中世	1973年
伝佐原八幡宮廟所		市 中世	1973年
会津御寺古墳		市 近代	1984年
かづと山古墳及び周辺地域		市 古墳	2008年
環状貝塚山・青角山		市 考古 講文	2000年
伝福寺遺跡出土品木舟		市 考古 講文	2003年
豊岡古墳出土埴輪		市 考古 古墳	2003年
平山貝塚出土土器		市 考古 講文	2004年
山井御飯正方夫墓出土品		市 考古 江戸	2007年
長井台地出土の旧石器時代石器群		市 考古 旧石器	2010年
東京湾第一海底構造物		市 史跡 近代	2009年
猿島			
三浦市			
赤坂古跡		国 史跡 余生	2011年
堀少門洞窟(即ち作房跡)		県 余生・古墳	

川崎市						
千鳥山貝塚	高津区子母国51-1481ほか	農	史跡	鶴文	1957年	
夏高根遺跡	高津区木本町2	農	史跡	先生	1971年	
西根寺古墳	高津区ヶ谷3-17	農	史跡	古墳	1980年	
馬場古墳	高津区馬場91-10	農	史跡	古墳	1971年	
春日神社・美園神社・常楽寺境内及びその周辺	川崎区宮内7-12, 21ほか	市	史跡	古代・中世	1969年	
千年伊勢山古官が遺跡	高津区地と柄子伊勢山123 1ほか	市	史跡	古代	2008年	
菅原古墓群 長沢1822番地古墓出土火葬骸骨	市	考古	古代		1997年	
丸丘	伝今良島大文字寺	国	考古	古代	1960年	
松原(妙法寺)	市	考古	中世		1988年	
坂神(市民マージアム)	市	考古	中世		1964年	
綾坂山東谷古墓出土火葬骸骨	市	考古	古代		1997年	
生田古墓群 生田沼古墓出土火葬骸骨	市	考古	古代		1997年	
生田古墓群 生田506号古墓出土火葬骸骨	市	考古	古代		1997年	
山川古墓群 山川古墓出土火葬骸骨	市	考古	古代		1997年	
有馬古墓群 後谷戸2ノマツ古墓出土火葬骸	市	考古	古代		1997年	
有馬古墓群 台坂2ノマツ古墓出土火葬骸	市	考古	古代		1997年	
野川古墓群 野川花地人地点古墓出土火葬骸	市	考古	古代		1997年	
五軒町国宝洋蔵文瓦	市	考古	古代		2003年	
万葉寺(奈良朝)文時代古墳出土品	市	考古	鶴文		2008年	
綾坂山城(文)時代古墳出土品	市	考古	鶴文		2009年	
下原古墳(文)時代後・晚翌出土品	市	考古	鶴文		2010年	
谷村神明社上皇御出土品	市	考古	先生		2011年	
遺跡						
氷名寺境内	鎌倉区・称名寺	国	史跡	中世	1922年	
三輪古墳群	鎌倉区	史跡	鶴文・先生		1966年	
朝来祭(通)	鎌倉区	市	史跡	中世	1969年	
大字・武藏野・森筋	高津区	国	史跡	先生	1986年	
日高赤金銀行本店	中原区	国	史跡	近代	1995年	
市ヶ瀬篠六古墳群	青葉区	農	史跡	古墳	1951年	
山川一里塚	戸塚区	農	史跡	江戸	1966年	
綾町前古墳群	青木区	農	史跡	古墳	1970年	
綾町古墳	港北区	市	史跡	古墳	1989年	
野島丘陵	今宿区	市	史跡	鶴文	1990年	
荏子田横穴	青葉区	市	史跡	古墳	1993年	
鶴岡日坂	横浜市・熊野神社	市	史跡	鶴文	1994年	
鶴見神社(境)日坂	横浜市・鶴見神社	市	史跡	古墳	2008年	
茅ヶ崎城址	都筑区	市	史跡	中世	2009年	
元町城址	中原区	市	史跡	鶴文	2013年	
三ツ戸日坂	狹余川区	市	史跡	鶴文	1988年	
印旛歎息印	綾部・般若寺	南	地域		1988年	
いのわせい(いの、ちの池の、つ)	綾北区・熊野神社	南	地域		1988年	
坂本通藏廬内	綾ヶ谷区・豊光寺	市	地域		1988年	
鬼太郎伝承地	狭余区	市	地域		1988年	
高麗堂跡	今宿区	点	地域		1988年	
七右衛門古墳群	全区	市	地域	古墳	1989年	
五橋(日米和親条約締結の地に残るタブノキ)	中原区	市	地域		1988年	
小笠原作庭	鶴見区	市	地域	近代	1988年	
坂本通五郎丸塗	西区	市	地域		1988年	
井手ヶ谷事件の跡	南区	市	地域	近代	1988年	
二ツ橋山家の地	郷谷区	市	地域		1988年	
東海道戸塀見付跡	戸塚区	市	地域	江戸	1988年	
台山忠志坂跡	黒川	市	地域	先生	1988年	
吉田由留常高塚・基	綾瀬・大石神社ほか	市	地域	江戸	1989年	
山川・里塚	綾瀬・御殿神社	市	地域	江戸	1989年	
任田宿常夜燈	吉善区	市	地域	江戸	1989年	
精引の大山道遺構	戸塚区	市	地域	江戸	1989年	
精引高木父子供養塔	今宿区・愛宕寺	市	地域		1990年	
印旛歎息印(山谷の洞窟)	小石・定光寺	市	地域	中世	1990年	
水谷天満宮境内	南浦区・大神社	市	地域		1990年	
吉田新田領守(日枝神社)境内	南浦区・日枝神社	市	地域		1990年	
望川台の碑	神奈川区	市	地域	近代	1990年	
鶴木久・赤木家附代の墓所	鶴見区・常陸多	市	地域	江戸	1991年	
鶴見島	今宿区・蒲戸神社	市	地域		1991年	
鶴魚塚跡	神奈川区	市	地域		1991年	
御川台の井戸	佐々木谷区	市	地域		1991年	
弁玉愛碑	神奈川区	市	地域		1992年	
萩本通野官代の墓所	綾羽区・人林寺	市	地域	江戸	1992年	
和田村道種改修碑	保土ヶ谷区	市	地域		1992年	
白根村道種改修碑	綾羽区	市	地域		1992年	
岡本橋記念碑	綾羽区	市	地域		1993年	
吉良家の供養塔	南区・萬國寺	市	地域		1993年	
白根不動の境内	綾羽区・白根神社	市	地域		1993年	
足子塚	今宿区・染毛寺	市	地域		1993年	
地蔵川の大井戸	神奈川区・延喜寺	市	地域		1993年	
吉田櫻型門跡	中区	市	地域		1993年	
井川前頭ゆかりの地	西区	市	地域	江戸	1993年	
萩本通野官代の墓所	綾羽区・萬國寺	市	地域	江戸	1994年	
神奈川山上の跡	中区	市	地域	近代	1994年	
神奈川奉行所跡(芦屋役所)	西区	市	地域	近代	1994年	
萩本通野官代の墓所	昭和区・三佛寺	市	地域	江戸	1994年	

唐木石丸家歴代の墓所	青葉区・長岳院	市	地城	江戸	1994年
根本武夷の墓	南区・定光寺	市	地城	江戸	1994年
伝説姫領の墓	金沢区・大京寺	市	地城	江戸	1994年
石兼庄徵の墓	泉区・山田寺	市	地城	江戸	1994年
九谷平	金沢区・全般塚	市	地城	江戸	1995年
飛石	金沢区・全般塚	市	地城	江戸	1995年
荒一義能跡	中区	市	地城	江戸	1995年
山田京上	京急区	市	地城	江戸	1996年
日本最初のガス会社跡	中区	市	地城	江戸	1996年
ヘボン支路	中区	市	地城	江戸	1996年
日本最初の洋式公園(手水公館)	中区	市	地城	江戸	1996年
近代水道水源地の跡(日本最初の野水井筒跡)	西区	市	地城	江戸	1997年
万葉城址	鶴見区	市	地城	中世	1997年
ビール製造発祥の地(ビール醸造所跡)	中区	市	地城	江戸	1997年
二刀削用水路跡跡	鶴見区	市	地城	江戸	1998年
内堀右近理家水道点(高低九分標)	南区・中村八幡宮	市	地城	江戸	1998年
旧帷子櫻塚	保土ヶ谷区	市	地城	江戸	1998年
横浜開港・開国に伴い寺院に設置された旗事跡					
・アメリカ領事館跡	神奈川区	市	地城	江戸	1999年
・イギリス領事館跡					
・フランス領事館跡					
解井沢古墳跡	西区	市	地城	古墳	2000年
旗本安藤家の墓所(お墓山)	渋谷区・御殿山	市	地城	江戸	2000年
横浜町会所跡	中区	市	地城	江戸	2000年
横浜天主堂跡	中区	市	地城	江戸	2001年
人民運動の碑	藤谷区・熱海寺	市	地城	江戸	2002年
横浜坂	保土ヶ谷区	市	地城	江戸	2003年
横浜街道の辻井坂	南区	市	地城	江戸	2004年
鈴之邊門旧跡	鶴見区	市	地城	江戸	2005年
白糸川の墓	港北区・二会寺	市	地城	江戸	2009年
日米和親条約締結の地	中区	市	地城	江戸	2009年
伝奇屋重史跡	金沢区・厚林寺	市	地城	中世	2013年
青柳堂	金沢区・弘明寺	市	地城	中世	1968年
土塁	保土ヶ谷区	市	地城	江戸	1973年
人面竹土器	鶴見区	市	地城	江戸	1984年
鎌倉市吉久保遺跡出土木簡	南区・県堀文化財センター	市	地城	江戸	2001年
南三名市上浜田遺跡出土(浜田耳飾)	南区・県堀文化財センター	市	地城	江戸	2001年
秦野市伊豆田遺跡出土の石器・铁器及び壳生	市	地城	江戸	2001年	
山北町尾瀬遺跡出土の石斧製作に関連する石	市	地城	江戸	2001年	
鎌倉市守尾遺跡出土品	市	地城	江戸	2001年	
三浦市横口阿賀遺跡出土品	中区・獨立歴史博物館	市	地城	江戸	2001年
鎌倉市吉岡遺跡跡地と藤沢市用田島区前進				旧石器	2004年
跡出土の貝石器時代の遺物同埋合石器					
御影寺境内遺跡出土遺物一括	市	地城	古墳	江戸	1988年
上矢部町富士山古墳出土品一括	市	地城	古墳	江戸	1991年
坂津(又三郎) 坂津	青葉区	市	地城	中世	1992年
坂津	神奈川区・坂のぎ稲荷神社	市	地城	中世	1994年
花山天皇御廟文時代墓削山上山	市	地城	江戸	1995年	
西八湖遺跡・笠置出土遺物一括	市	地城	古墳	江戸	2000年
北門1号出土遺物一括	市	地城	古墳	江戸	2006年
北門(昭和四十一年八月日)	港南区・上成寺	市	地城	中世	1992年

平成 25 年度神奈川県考古学会講座

時空の交差点－遺跡の保存と活用－

発 行 日 平成 26 年（2014 年）3 月 16 日

編集・発行 神奈川県考古学会

印 刷 株式会社 アルファ